

書 卷 五 一

# 集談奇傑豪

編士學文山丸

東京文永館發



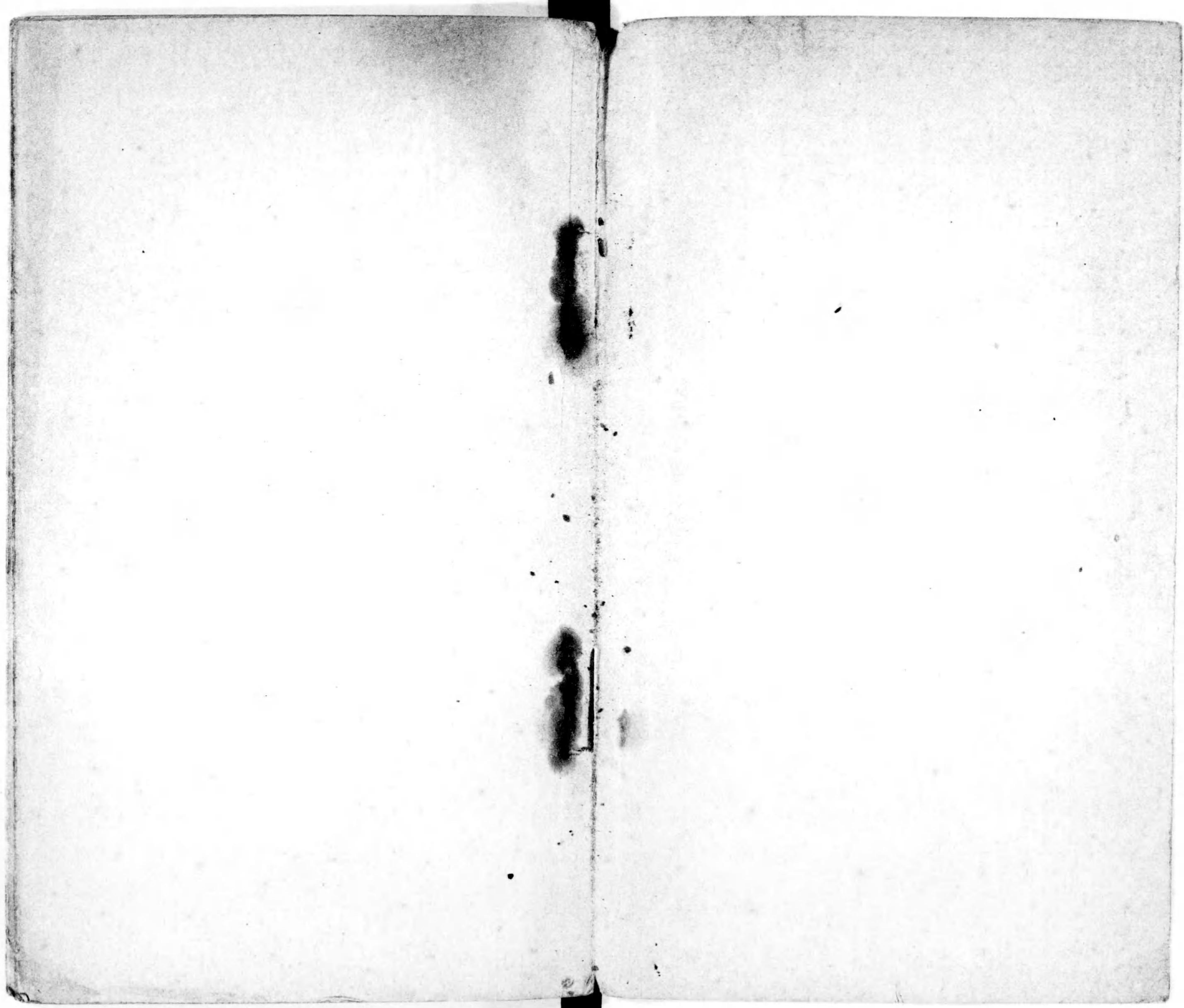
特



# 始









特100  
187



第五編  
第一

豪傑奇談集

丸山文學士編

文永館發行



大正  
4. 5. 7  
内交





## 興味と智識の源を平易に採らしむる

### 新叢書の發刊

近時名著を摘要して其梗概を紹介する叢書類一時に簇出したり、何れも泰西の近世作家が名篇を借り來つて力めて簡單に力めて安價に之れを江湖に提供しつゝあり、此舉や文教の爲大に慶賀すべき事に屬す。而も其缺點を擧ぐれば、其近世作家を趨ふの急にして、近世以前の作家の名著を見棄たる事と、其範圍は大抵西洋文藝に限られたる事と、惣べて文章未だ平易を尊ぶべき事を守らざる嫌あり。我新叢書の現はる蓋し此短處を補はんとする也。乃ち本叢書は泰西近世名著を紹介する外に、弘く古今東西の文藝作品を紹介せんとす。

而して飽く迄平民的に飽く迄興味的に、文章も亦噛み砕いて力めて平易に書かんとするなり。こは従前の叢書類に例なき方面に旗幟を掲げ、併せて従前の叢書類



よりは比較的廣範圍の讀者を吸集して、古今東西の文藝趣味を廣き野に種子蒔かんとするに外ならず。僅かなる努力と、僅かなる時間と、僅かなる金錢を以て甚深の興味を購はんとする人士は來つて本叢書に夫れを索めよ。

監 修 者 談

大正四年五月

豪傑奇談集はしがき

雄々しき物語りを多く聞く事は雄々しき氣風を養ふ基なれ、今世の風潮は神經鋭く氣細やかにして男子尙婦人に似たるものあり、之れ日本男子の眞領にあらずかゝる氣風の時に纖弱なる讀物は害こそあれ益なし、我「豪傑奇談集」はかゝる氣風を嫌つて剛健の氣風を涵養せんとて公刊したるなり、讀者の面前に現はるゝ人物の一々の鬚髯をよく見玉へよや

大正四年春



目 次

博多坊主の剛膽	一
不思議の對面	一二
剛勇大力三宅兄弟	二〇
孝子の仇打	三三
鷹の大根を有難候	四八
老力士十右衛門	五三
一丈三尺五寸の大槍	六〇
此弟子に此先生	六五
加賀の名物男	七九
剛膽無類の快男子	八九

目 次



單身露西亞に行く……………一〇五

戀の返報に糞垂れる……………一一九

地震で死んだ英雄……………一二七

豪傑の朝飯前……………一三五

南海の人中龍……………一三九

元日の夜の血闘……………一六〇

明治武人の典型……………一六六

目次終

豪傑奇談集

博多坊主の剛膽

戦國の頃諸方に隠れたる豪傑がゐりました、武士ならぬ者迄心剛に膽太く、中にも九州は朝鮮に近く支那の貿易もありわけて南蠻船の來る所でありましたから、町人の内にも大した人物が居りました、博多の島井宗室は其一人であります。

筑前博多は昔から外國船の船がよりする所で富有の商人も多く一體に氣の勝つた土地柄でありましたが、此所に育つた宗室は殊に博多根性を特出してゐました。彼れは博多の豪商の家に生れ幼き頃より才智常人に抽で遊び事にも賭をしなれば面白がらないといふ氣質でありましたから、長じても性根骨の太い男でありま





した、商ひは支那呂宋暹羅朝鮮を相手の貿易で、其國々に出店を置くといふ手廣い商賣をしてゐました、従つて家は次第次第に富み榮えまして其頃九州の探題大友宗麟も此宗室を頼みにして時々金子入用の折は用達て貰つてゐました、大友家の傳手から筑前の秋月家、肥前の筑紫家松浦家へも出入して軍用金を立て替へて押しも押されもせぬ豪家となりました。

天正十年の初夏、宗室は神屋宗湛と一緒に京都に遊びに來ました、聞えたる博多の金持なり且つ茶の名人として、其時天下を半ば握つたる織田信長は一度會ひたいと、自分の宿所にしてゐる西洞院の本能寺へ招きました、信長は中國征伐の出馬のため居城なる江州安土から京都迄出て來て之れから中國へ下る時でありました、すると六月朔日の晩俄に明智光秀の爲め本能寺を取圍まれて焼打にあひました、此時丁度宗室と宗湛も本能寺に宿つてゐましたが、不圖耳につく人馬の音怪やと思ふ間なく一面の火になつて本能寺は燃え盡る、さては謀反人なりと氣



付きうろたへて後の物笑ひになるなど、手早く着物を着替へましたが、早や信長生害とありますから、今更何とも仕様がな、唯本能寺の茶の間にかゝつてゐた弘法大師の千字文の軸は天下の寶である、あれをやみく焼くは勿體ないと、風流氣のある人でありますから、煙りの中をぬけ火の粉を潜つて件の軸を持出した。

あれ丈けの動亂の中にも矢張風流を大切にする宗室の心掛けは傳へ傳はつて當時の人をして。

『流石の茶人丈けあつて感心だ』

と感服さしました、扱宗室は斯様な茶道名譽の人でありますから、家には尊い道具を澤山所持してゐます、中にも檜柴と名づけた茶器は奇代の珍品で當時の數奇者は皆涎を垂してゐる程の名器でありました、大友家からも一向懇望とある、秋月家からも是非所望とある、果は所望が嵩じて秋月家にては強つて譲り受けた

い否とあらば軍勢を以つて博多を取圍んでも譲り受けるといふ強談が來ました然るに宗室も亦剛情無類、

『一旦差上げられぬと申せしからには、誰人の仰せにても斷然差上げられぬ、軍勢をお出しになるや如何は當方の關はる事でない、秋月家ともあるものが茶器一つで軍兵差向けられるとは近頃の沙汰ぢや、宗室何時でもお引受け申さう』

といひ切りました、其豪膽な返答には秋月家も舌を捲いて今更軍兵を動かすといふ譯にも參らなくなりました、此檜柴の茶器は遂に太閤秀吉の耳にも這入りま

した、千利休を遣はして是非にといふ所望もありましたが宗室仲々差上げない。其中に太閤九州征伐となりまして兵を進んで出ました、秋月家に於ては始め薩摩の島津家と合體して近所の城を攻めてゐましたから、秀吉の大軍來ると聞くや到底あの猛勢にはかなはぬ、さりながら並普通の事では太閤は承知すまい、博多の宗室は千利休とも知れる中従つて秀吉の奉行中のきれ者石田三成をも知れる



から宗室の傳手で降服を申出やうと、一日宗室を尋ねて色々の話をしましたが、其話の末に名器檜柴を拜見したといふ。

別段別條もない様子故宗室は快諾して取り出すと、秋月は殊の外に褒めたへてゐましたが、秋月心中に思へるやう此名器は太閤が非常の懇望の由聞き及んでゐる、一番此器を奪つて土産として太閤に見参致さうと、宗室を欺きたばかりちとの際に檜柴を盗んで逃げ出しました、程經て宗室は檜柴の盗まれた事を知り、且つ秋月が何故盗みしかといふ事も知つたが、曩にはあれ丈け惜しんだ檜柴も盗まれたとなれば今更愚痴を申しても仕様がないと綺麗さつぱりあきらめをつけ、顔の色も變なんだとは其腹の大きさが判りません。

扱秋月は件の名器檜柴を土産にして秀吉に降参しました、秀吉は降参を許してやりましたが、頓て軍を進めて博多に來た時、宗室もお目通りをした、其折秀吉いふには、

「お前は割合度胸のいゝ男ぢやが、一體武士と町人と執れが望みぢや」

と尋ねました、室室ぬからぬ顔して。  
「武士も嫌ひぢや御座りませぬが、一體愚老は町人の家に生れ落ちたものでござりますから一生町人でござりませう、町人々々と申さるれど、商賣の掛引は殿下の軍略と少しも違つたものぢや御座りませぬ」

「然らばお前の望みの物を遣はすが何がほしい」

「されば候、あの乾に當る海がほしく候、あの海が愚老めの戰場で御座ります」

「ふむ博多坊主はよくもぬかした、矢張お前は武士が望みぢや」

「いえ、武士武士と申しても生々しい武士は大嫌でござります」

「面白い事をいふ奴ぢやのう」  
と大に秀吉の氣に入りました、秀吉は茶の會を開いて宗室も招かれました、秀吉の茶博士千利休の申すには、



から宗室の傳手で降服を申出やうと、一日宗室を尋ねて色々の話をしましたが、其話の末に名器檜柴を拜見したといふ。

別段別條もない様子故宗室は快諾して取り出すと、秋月は殊の外に褒めたへてゐましたが、秋月心中に思へるやう此名器は太閤が非常の懇望の由聞き及んでゐる、一番此器を奪つて土産として太閤に見参致さうと、宗室を欺きたばかりとの隙に檜柴を盗んで逃げ出しました、程經て宗室は檜柴の盗まれた事を知り、且つ秋月が何故盗みしかといふ事も知つたが、曩にはあれ丈け惜しんだ檜柴も盗まれたとなれば今更愚痴を申しても仕様がないと綺麗さつぱりあきらめをつけ、顔の色も變なんだとは其腹の大きさが判りません。

扱秋月は件の名器檜柴を土産にして秀吉に降参しました、秀吉は降参を許してやりましたが、頓て軍を進めて博多に來た時、宗室もお目通りをした、其折秀吉いふには、

『お前は割合度胸のいゝ男ぢやが、一體武士と町人と孰れが望みぢや』と尋ねました、室室ぬからぬ顔して。

『武士も嫌ひぢや御座りませぬが、一體愚老は町人の家に生れ落ちたものでござりますから一生町人でござりませしやう、町人々々と申さるれど、商賣の掛引は殿下の軍略と少しも違つたものぢや御座りませぬ』

『然らばお前の望みの物を遣はすが何がほしい』

『されば候、あの乾に當る海がほしく候、あの海が愚老めの戦場で御座ります』

『ふむ博多坊主はよくもぬかした、矢張お前は武士が望みぢや』

『いえ、武士武士と申しても生々しい武士は大嫌でござります』

『面白い事をいふ奴ぢやのう』

と大に秀吉の氣に入りました、秀吉は茶の會を開いて宗室も招かれました、秀吉の茶博士千利休の申すには、



『宗室殿、一體あの檜柴の茶器は先頃殿下の御所望でそれがし態々懇望の使ひ迄致したが、あれを殿下に差上げずに秋月へやつたのは何いふ考へからぢや、あの檜柴は今殿下の物になつてゐるからいゝものゝ、何故殿下のお望みを断らしやつた、今度の茶會にはあの檜柴は屹度出る其時今のお尋ねが出たら、お前様は何と返答する』

かういふてくれましたから宗室つらつら考へるに、今度の茶會には自分の顔出しはよくない、あの檜柴はと聞かれた時本當の事をいへば秀吉は秋月の詐を怒つて秋月に對し如何なる咎めがあるかも知れぬ、一茶器のために武士一人を苦しめるも本意でないと思へましたから、當日の茶會には態と病氣といひ立てゝ出席しなかつた。

其後大阪城へ宗室が行つた事がありました時、果然秀吉は彼檜柴を見せて、『博多坊主此器を見、覺えがあらう』

と来た、それやこそと思ひながら宗室態と空とぼけ、

『之れはく、珍貴の品、徳川殿より献上の初花と存じます』

『初花ぢやない、お前の盗まれた品ぢやらう』

『いゝえ、愚老め斯様な品を盗まれた覺えは御座りませぬ、何かお間違ひでございませう』

と堅くいひ張りました、後で此事を聞いて秋月は大に恥入り且つ徳と致しました。

月日は經つて秀吉は朝鮮征伐を思ひ立ちました、折角日本四海の内平定し、民は安んじた折に又もや朝鮮征伐とは大變ぢや、何とか諫めたいが秀吉は例のいひ出したらきかぬ人物、誰も怖れて諫言申すものがありませぬ、石田三成も大きに心配して之れは博多の宗室に頼めばあの男なら膽の太い男だからやつてくれるだらうと、宗室大阪に來た折秘に頼みました。





「成程只今左様の大兵を動かされるはよろしくない、坊主必らず一度はお諫め申さう」

と其儘伏見に行きました、此時秀吉は博多から宗室が來たと聞いて、それはよいものが來た、彼れは朝鮮の様子をよく存じてゐやう呼び出して聞かうと、伏見城へ召された、宗室期したる事なればおめず推参して、秀吉の問ふ儘に朝鮮八道の様子を詳に告げました。

「ふむなか／＼存じてゐるな、博多坊主は武士が好きぢやから、此度の戦さには斥候として遣はさう」

と大變機嫌がよい、然るに宗室此所ぢやと許り膝を進め、

「いや其御詮は御辭退申します、仔細は愚老商賈冥利として算用立たぬ商賈は致しませぬ、いかに殿下の御威光とて儲からぬと定つた軍はお止めになつたがよろしいと存じます」



と構はずいひ放ちました、果して秀吉烈火の如く憤りました。  
『黙れ坊主、推算なる一言、誰かある彼奴を引き出して首打て』  
と散々の體で奥へと這入つて了ひました、宗室いひたい丈けいつて諫言したの  
でありますから悪びれず覺悟をきめてゐました。

秀吉首打てとあるがもと／＼家來の者が心配して宗室に頼んで諫言をいつて貫  
つたのであるから、やみ／＼首打たさす譯にいかぬ、三成行長始め奉行役人、さ  
ては利休などが様々秀吉に詫を入れて、宗室の首はつなかりました、宗室覺悟の  
上とて少しも驕がず、夫れより徳川毛利家等へ挨拶に廻つて歸國しましたが。

『汝ならこそいふてくれたのぢや、よく殿下に諫言申してくれた』  
人々に褒められて夫れから博多に歸り身を謹んでゐました、彼は一商賈であり  
ますけれど博多坊主の宗室といへば大小名に迄其名は響いたものであります。

不思議の對面

越前結城家は武門の譽れ高き家とて家中何れも武勇を競ふて各自武邊自慢をし  
合つてゐました。かゝる事は武家としては然るべき事で、かうやつて武邊を競へ  
ばこそ家の譽れもあがるのであります。

此越前家の家臣で大身の中に數へられる狛伊勢といふ歴々がありました、其嫡  
男が丁度鎧の着初めをやる事になりましたが此鎧の着初めといふは武家に取つて  
大事の儀式、一生の武邊の運が定まるは此の日と心得てゐましたから、同じ越前  
家の阿閉掃部といつて豪勇の武士がりましたから、豫じめ、

『拙息鎧の着初めには是非掃部殿の武勇を類かりたい、萬事よしなに頼みます』

『いや痛み入つた御挨拶、餘の御仁も御座れば』

と辭するも聞かず、是非阿閉殿の武邊にあやかる様にと強いての頼みに、此上  
は掃部つれなく斷る事もならず、遂に承知をしました。

扱當日は目出度き儀式とて、ある丈けの晴れを盡くし、掃部に我子は鎧を着せ



て貰ひ、萬事の儀式も済んだ後、祝宴に移り頼みある剛者ども酒盛り一しきり賑ひましたが、酒も三行大分廻つた頃に、狛伊勢は列座の面々に向ひ。  
『お蔭を以つて拙息一代の儀式も滞りなく済みました、就ては掃部殿にはわけての御骨折りを與りましたが、此上の望みには掃部殿の武功の物語一條お聞かせ下される様に願ひましたいが』

『至極同感』

『之れは時に取つての物語ぢや』

『是非聴聞致したい』

と列座の面々は聲を揃へて賛成しました、掃部大に當惑し。

『これは近頃の御所望小生の武功なぞひらに御容赦』

『是非に、今日の式にもかなひますれば』

『我々共も興を覺えますで』

とやかましく催促されて掃部は此上斷るは却つて無禮と心得。

『然らば嗚呼がましけれど申上げん。』

あれを申さうか之れを申さうかより、小生一生の内之れ程の武者振見た事のない見事な武士の話を仕らう。

聞も傳はる賤ヶ嶽の合戦の折、我等柴田方につきしが、ある日の事戦の末に暮方に及び小生只一騎となりて、餘吾の湖のわたりを引き申した。

夕暮の日は没したれど残ん餘光に山の端は尙明るく、藍碧湛へし湖の上を吹く風靜かなる汀を只一騎味方の陣へと退く折しも、遙に此方へさして馳せ來る人馬の音。

敵か味方か。

駒のあがきを止めて振りかへれば、聲をあげて此方呼び止むる武者一騎。

應と答へて此方よりも馬を近付けば、然るべき騎馬の侍にて、其人申すやう





には。

今朝よりよくかせげど、未だよき敵にあひ申さず、御人體を見らけ幸とこそ  
存ずる、御不祥に候はんも御相手になり申すと馬を進み來ました。

此方も望む所と、互に馬をのり放し、已に鎧を合さんとせる折。

其人俄に聲をかけ。

しばし御待候へ。

何事の候ぞ。

今朝より雑兵を多く突き崩し候まゝ、鎧よごれて候、鎧を洗ひて御相手になり

申さん。

いひ捨て、鎧を餘吾の湖にひたし、二三遍あらひて。

さらば仕らう。

と鎧しごいて突いてかゝる、こは心憎き敵なりと、それがしも心を凝めて突き



合ひ、息もつかせず突き合ひましたが、相手はなかくの剛の者、何れも劣らず勝負致す内に、没陽の影は全く消えて四面は暗黒になり、鎗の穂先の閃く外は、敵の姿が見えねば、我姿も敵にわからず、只鎗の閃きをたよりに突き合ひ居りました。

然る所、又もや其人、やゝと聲をかけ鎗をひかへし故、我れも鎗をひかへましたるに。

最早鎗先も見えず候、此上は過ちの功名あつても又は怪我あつても面白からぬ御残り惜しくは候へど之れ迄に候、御いとま申すべし、つけては御名をこそ承はりたい。かく申すそれがしは青木新兵衛と申すものにて候。

我等も之れを聞いて名乗りあげしに。

此後又も陣頭に出合はゞ、お互に人手にはかゝり申まじく、又味方と相成り候はゞ、わりなき入魂いたし候べく、さらば。

と立別れたが、かゝる見事な武者振は掃部今だに見た事は御座らぬ、嗚呼ながら伊勢殿御子息の御祝儀に、いさゝか申し上げた』  
聞きおたる列座の武士、興ある物語に

『さても心憎きもの』

『天晴れの武士ぢや』

『左様の敵に渡り合ひたいものぢや』

と何れも感に入つてゐますと。

『もし』

と席の末をかきわけて現はれたものがあります、之れは餘人ならず、其頃伊勢の家へ心安く出入する浪人で青木方齋といふものでありました、此日も来て勝手にゐましたが、今の掃部の武邊話を聞いてにじり出たのであります。

『只今の御物語につき今更思ひ起し涙をおとして候、其時の御相手の青木新兵衛



は、恥しながら我等にて候、かく申すばかりにては合點參るまじ、其折の双方の  
鎧のおどし、馬の毛色一々申して見んか」

と昔を思ひ浮べて、余吾の湖の合戦の一埒を物語つた、掃部膝を進めて、彼一  
言此一言、しつくり話は符合する、兩人は夢中になつて其時の事をくり返へす、  
聞く者も夢中になつて耳を傾ける、實證其人に相違ない。

「なつかしや青木殿、盃一つ食べやう」

と掃部は盃取つて干して差した、引き出物に腰の脇差ぬいて與へました、不  
思議の邂逅に一座酔へるが如く、夫れから青木の武名一時に高くなつて、遂には掃  
部と同じく結城家へ召し抱へられました。

剛勇大力三宅兄弟

田舎で流行る勸進相撲、伊勢龜山在で近郷近在の力士が集つて相撲をやつて  
ました、一番二番と番數が進むにつれ興味は加つて來て、見物客は何れも熱狂の

城達しました、觀ての事小櫻、金磔の兩人土俵の上、現はれて力を角すること  
となりました、金磔の身材六尺餘りにして色黒く骨逞ましく、小櫻は五尺四五寸  
の小兵ながら之れも覺えの物と見えましたが、何分金磔の方が體格が立派ですか  
ら小櫻の負かと思はれました。

機合して立ち上るや、金磔は力に任せて突張ります、小櫻よく之れを耐へて敵  
の隙を見てガツキと食ひ入りました、こはしまつたと思ひながら金磔は嵩にかゝ  
つて上から押潰ぶさんとするを、角力の秘術見事な投がきまつて金磔は自名自稱  
磔の如く土俵の外へ飛んで行きました。

思ひもかけぬ小櫻の角力上手に見物我れを忘れて、ヤンヤ／＼と褒めそやしま  
したが、餘り見事に負けたので金磔方は口惜しくて耐まらぬ。

『野郎出ろ』

と之れは又金磔方第一等の力士、更料とて造り損ねた仁王の如き大力士であり



ます、味方の敗北に心少し焦ら立ち、土俵の上にウンと起ち上つた、小櫻心得た  
りと組んでかゝるを無雑作に禪を引いて二三邊ブン／＼振り廻して土俵の上へた  
ゞきつける、之れも又恐ろしい力士ぢやと見物鳴りを静めて見てみると、小櫻方  
の力士は我れこそしてやらんとつぎ／＼に七八人許り替る／＼に出て取り組むけ  
れど齒の立つものは一人もありません、更科は豪慢な様子を見せて、

『さあ誰でも来い、續く野郎はねえのか』

と廣言憎くしげに吐いて睨め廻はすが實際力士といふ力士は皆出て皆負けたか  
ら續く力士はありません、ウヌ更科の高慢振りよと齒を食ひ切つても土俵へ出れ  
ばかなはぬから力士は皆苦い顔してゐました、更科益圖にのり土俵の真中に膠  
髯ぬく憎らしさ、見物も亦憎らしくなつて、

『更科をやつゝけろ』

『誰か出ねえか』

『更科を倒せ』

と口々にいふけれど更科の力量を見た程の者は誰一人出でゝ相手にならうとし  
ませぬ、此所と同じ見物の群に交つてゐた、立派な侍、従者らしきを數人連れて  
ゐましたが、更科の振舞餘り傍若無人なるに耐へ兼、着物を脱いで立合はうとし  
かけました。

『モシ／＼、それはお身柄』

と従者らしきものは頻りに止めやうとしてゐます。

『いゝわ』

『いゝえ、お身柄を辨へられました』

『武士が角力取るに何恥ぢや』

『相手によりけり、相手は下素の者』

『角力の相手に身分の高下はない』





『其上彼れ更科は力量なり術なり、巧者の者なれば、若し千鈞のお身に』  
 『は、更科とて鬼神にもあらぬ、止めるなああの廣言の舌の根とめてくれる』  
 と着物を脱ぎ捨て、土俵の上へしづしづと現はれました。

『ふむ、相手が来たね、負けぬ用心さつしやい』

更科は傲然として立ち向ひます、此相手の者を龜山城主三宅大膳亮康盛とは知りません、三宅康盛は大力無双の大將で青竹をしごいて帯となし、吹く息は土器を破るといふ程の豪勇の人でありました。

好きな道とて今日の角力を忍びの姿で見物してゐたが、更科の高慢に怒り勃然と發し、熱する餘りに土俵に上つたのであります。

見物の者共も、力士側も眞逆龜山の城主とは知りませんから、

『しつかりやれ』

『ほう大分強さうぢや』



「更科負けるな」

「更科負けるぞ」

と大した騒ぎになりました、康盛角力には巧者である、綺麗に立ち上つて採み合ふ内に更科の禪をひいた、エイヤと掛摩諸共に六尺有餘の大男を眼より高く差上げた、其勇猛に見物一同呆氣に取られて、

「あれは何といふ力士か、豪い力ぢや」

「あの更科を小兒あしらひとは並大抵の力士ぢやないよ」

「豪い、其所ぢや其所ぢや」

「古今無類の大力ぢや」

康盛を更科を差上げた儘、土俵を一顧持ち廻り。

「如何に更科勝負は見たらう」

更科は敵の強さに驚きながら、之れもなか／＼のしたゝかもの、差されながら

負けず氣を出し、

「勝負はまだつかぬ」

「何、勝負はつかぬと、おのれ、かうして勝負をつけてつかはず」

と康盛は怒聲一番、更科を土俵の上へ敲きつけました、六尺豊の大男が地響

きして投げられたと思ふと、無残やな背骨を折られ血反吐を吐いて即死してしま

ました。

康盛は傍目もふらず、其儘塵を拂ふて我邸へ歸りましたが、跡は呆氣に取られ

て。

「あれは天狗ぢやないか」

「道理で眼が光かつて、鼻が高かつたぜ」

と噂とりく、扱康盛は歸館致したが、先程更科を投げた時、更科は投げられ

ざまに足を翻へして康盛の胸を蹴つたが其あとが少し痛んだ、けれどさしたる事



もあるまいと大して氣にも止めずにゐますと、翌日から其箇所がキン／＼痛み出し半年許りは煩ひになつたが其内治りました、其後も寒暑の氣候變り目には必ず少し異常を覺える、更科が最後に蹴つた一撃は尋常の者なら蹴殺される程力強いものであつたらうが、康盛ならこそ痛む位ですんだのであります。

此康盛は已に斯の如き強力であるが其弟に康重といふ侍がありました、之れも強力との噂はあるけれど曾つて力の程を實見した者はありません、或日康重に向ひ兄の康盛は、

『お前は力が強いと聞くが今だに見た事がない、何の位力があるか一度見せてくれぬか』

といはれて康重恥入りたる體に顔を赤めながら、

『いや左様に仰せられる程の者でござりませぬ』

『隠すには及ばぬ、此方も多少力量あるものぢやが、兄弟一つ力比べをして家臣

のものに武藝を勵ます導きでもすればよいでないか』

『なか／＼以つて兄上の強力は世上一般に知れ渡つたる事實なれど、小弟などは』

『いや是非やつて見い』

と康盛は聴き入れませぬ、此上は辭する言葉もない、然らば御免と、兩人腕押をやつて力を量らんとしました、兩人椽を臺として押合ふたが、兄の方は敷居に右の足を踏みかけて力んでゐました、元來堅固の敷居でありましたが強力無雙の康盛の力に耐へでや中程より踏破れて三間許り飛び散りました、此時弟康重は椽の柱を力として飽く迄耐へてゐましたが、

今しも敷居が折れた途端に康重は力餘つて椽から下へ落ちやうとしたをやつと踏み耐へました、之れを見て康盛我が勝つた者として喜び。

『お前もなか／＼強い、其内又やり直さう』



鼻高々になつて居りました、其後康盛は奥方を迎へる事になりました、其國の  
習慣として上下貴賤の嫁ひなく婚禮には婿になつた男に水をかける儀式がありま  
す、今度主公が婚禮にも此水祝をしゃうか、どうしやうかとひそく相談してゐ  
るを強がりの康盛は聞いて。

『ふゝん乃公に水かけるには、お前達の首の骨を用心せい、へし折られない様に  
用心せい』

と力自慢におどかします、臣下はあの大力の主公に掴まへられれば本當に首の  
骨位は危いと怖がつてゐましたが、此前後の事を聞いた弟康重は餘り兄の大言  
に苦笑ひしながら、

『兄上とて儀式は儀式ぢや、水祝はして進せねばならぬ、皆々怖がる事がない、  
此康重が身に引受けて屹度水かけて見せやう』

といふ兄も兄なら弟の康重殿も相當な力量がある、殊に先達ての力競べの返

報もあれば之れは面白い事になるだらうと、面白がつてゐるものもありました、  
扱婚禮も近付いて來ましたから、康重は兄の許へ参り。

『此度はお日出度い、就いては儀式により某が水祝を致さうと存じます』

『ふゝん、お前が見事水祝ひするか』

『おんでもないこと』

『屹度な、康盛の力の程をまだ合點参らぬか』

『いや存じて居りますが、力は力、儀式は儀式』

『でも乃公は力にかけても水はかけさせない』

『それでも致します』

『どうして致します』

『かうして致します』

といふなり麻上下の儘ズカ〜と進み、何を小癩なとせゝら笑ふ兄をむづと掴



まへて小脇に抱へ、

『御免候へ』

といふなり起ち上つた、康盛さうはさせぬと力んだが何した事か少しの身動きもありません、こんな筈ぢやないと力めば力む程康重は強く締めて椽先迄運んで來ました、而して八尺餘りある花崗石の手水鉢を右の手に抱へ、左の手に兄を抱きしめて、兄の頭より手水鉢を逆にしてザツトかけ傍にゐる近習にも、

『其方たちもお祝ひ申せ』

といふ力の強さ、近習は呆れ且怖れて、之れは兄殿より一段上手の力強よぢやと舌を捲いて驚きました、頓ての事兄を上座に裾へ。

『誠に目出度う候』

と祝儀の言葉を述べた、之れには力自慢の康盛も我を折つて、  
『上には上があるものぢや』

と感心して。

『それにしては光日の其方の腕押しに負けたは』

『あれ兄上の勝と覺召すか、兄上にお怪我あらせじと存じ、態と力をゆるめてかゝり候にて候』

之れで兄も全く感心してもう力自慢はいはなくなりましたが、それでも黙つて力を増すやうに勵みました、能ある鷹は爪を隠すならひ、物事はつゝましげにするが本當であります。

### 孝子の仇打

戦國時代に越前の國守朝倉義景の家來に松木内匠といふ者がありました、此者を年來仇に思ふ士がありました、到頭其者のために打れて松木は落命しました。

之れで家は斷絶となり妻は當年十歳の子を連れて何地へともなく立退き、世間





を憚つてある山奥に棲まつてゐました、けれど片時も良夫の仇を忘れる事なく、  
 『お前が大きくなつたら陀度阿父様の敵を取つておくれよ』  
 といひ聞かして育てゝゐましたが、子供も幼少なれど我父が人手に逢つて打た  
 れしと聞いて口惜しく、生長の後の必らず其敵を打つて亡き父の靈を慰めんと、  
 かりそめの戯れにも劍術の遊びをしてたとへ山奥に月日を送るとて、父の仇打の  
 事は一日も忘れませなんだ。

月日の経つは怖ろしいもので、其子はいつしか廿歳の大人となりました、もう  
 此年になつたらいつまでも父の敵を捨て置くものかはと、まづ相手の様子を探つ  
 て見ると、相手の士は松木を打ち打つたが其復讐を怖れて、立派な家をつく  
 り其四方に深い堀をめぐらし、夜は堀の橋をひいて渡れぬやうにして、用心おき  
 おさ怠りない、かう用心堅固にしてゐられては松木は孝子の一念に思ひつめても  
 つけ入る障がありません、何とかして此邸内に這入つて首尾よく本望が達したい



と、夫れから邸の様子を尙詳しく見廻りますと、唯一つ忍入るべき傳手があります、夫れは臺所の煙りを出すべき引窓があつて、其引窓の下は井戸で丁度釣瓶の車がある、然らば此引窓より忍び入り、釣瓶の繩をつたへば家の内へ這入るべきよすががあると合點しました、かうやつて毎日敵の邸の模様を調べるには勿論身を乞食に扮して忍びく調べたのでありますが、かう決した上は一日も容赦はし難しと、夜の更けるを待ちかねて敵の邸の前へと出かけました。

すると例の如く堀には橋がひいてあります、併し之れは覺悟の前でありますから、前の堀へ音せぬやうに這入り、忍びやかに遊いで向ひの岸へと上りました、夫れで濡れた衣服を絞り、かねて様子を見て置いた門を這ひ上つて、とうく屋根の上にあがり引窓の所から釣瓶の繩をたよりに忍び込まうとしたが、おぞましや釣瓶の繩が中途からふつと切れて、あれよといふ間もなく松木は井戸の中へと落ちました。

松木がしまつたと思ふ迄もなく、只今の夥しき物音に家内の者は皆々眼をさまし。

『夫れ賊が這入つた』

『賊は井戸の中へはまつた』

『ひんづらまへろ』

『いや過まつて取逃してはならぬから、上から鎗で突き殺せ』

といふ騒ぎになりました、不覺にも井戸に落ちた松木は人々の騒がしい聲を聞いて、今上から鎗で突き殺されば夫れ迄だ、生命はおしからねど亡き父の恨みを晴さで空しく死ぬは残念だと思ひましたから、井戸の中から大聲あげて。

『助けて下さい、後生だから助けて下さい』

と聲を限りに泣き叫びました、夫れを主人乃ち當の敵が聞きつけて。

『はまつた奴は弱虫だ、殺さずに引上げて見よ』



といひますから、然らばと一條の繩を井戸の中へとおろしました、之れ幸ひと  
松木は繩にすがれば。

『引上げてやるから、身體を軽くしろ』

と五六人寄つて力を合せ引き上げてくれました、見れば全身濡鼠になつた乞食  
の若者でありますから。

『貴様が泥棒に這入つたのか』

『へえ晝間此近所にうろくします乞食でございます、今日晝間お邸に澤山食べ  
物があるのを見ましたから、悪いとは知りながら乞食の淺間しさ、つい大膽な氣  
になつて忍び込みました、以後は屹度氣をつけますから何卒此度はお宥し下され  
ませ』

と言葉に憐れを含まして語りましたから、家の者共

『ふむ食へぬ悲しさに盗みか』

『貴様屹度改心するか』

『へえもうこりく致しました』

『本當に食べ物がほしきの泥棒ならゆるしてやつてもよいが』

と口々にいふてゐるを聞いた主人は。

『いや待て、存ずる筋がある、其者の面をあげて見せい』

といひました、之れには松木はぎよつとしました、もう百年目か、現在眼の前  
の父の敵を見て跳りかゝらんにも刃物はない、殊に敵は多くの者共に護られてゐ  
る故下手な手出しは決して出来ぬ、さりとして此儘殺されるは恥の上の恥と、心は  
千裂れる様になつてゐました。

家の者共が引き立て、見せる乞食の若者の面體をば、主人はちつと見てゐたが  
『吐すな奴め、貴様は泥棒に這入つたに相違ないが、目ざすは食物ぢやなからう  
此首がほしからう』





「圖星をさゝれたが、此所であかして了へば何にもかもありませんから。」

「いゝえ、決して、さもない心から」

「まだ其様の事をぬかす、貴様は十年以前我手に打れし松木のゆかりの者ぢや」

「いゝえ、松木でも杉の木でもござりません、只の乞食で」

「隠しても汝の面體見ればわかる、屹度松木のゆかりの奴に相違ない、今夜忍び

入りしも敵打ちのためぢやらう、併しかうなれば不憫ぢやが返り打ちぢや、者共

こいつ生かして置いては寢ざめが悪い、今夜中に墓原へ引き出して打首にして

へ」

と命じました、違ひます〜といひくるめんとすれど聞かばこそ、多勢のため

によつてたかつてがんどがらみに縛られて了ひました。

「當家を覗ふ太い乞食め」

「念佛申して待てゐよ」



と五六十人の若者が引き縛つた松木の孝子をば引つかつぎ松明點して山を越えて墓原へと運び行きました、其途中に於て細い山路を通ります、一方は深い谷で道は一人しか通れぬ崖道でありました、松木はつくづく考へるに此儘墓原迄つれて行かれれば首になるにきまつてゐる、さればと我一人にて此五六十人の人間に敵對することは出来ぬ、同じ死ぬなら丁度今自分の繩を持つてゐる者は一人ぢやから、あれを引きずつて繩付きの儘此谷底へ轉げ落ちやう、運なくして死ねばと惜しむ所はない、運よく助ければ又父の恨みを晴すすがもあらうと、心逞しい若者でありましたから、早くも決心して突如。

『曳ッ』

と聲かけるや身を鰻へして深い谷へと飛び込みました。油断をやられて繩を取つてゐた者も同じくずる／＼と引きずりこまれて之れも深い谷へと眞逆様に轉げ落ちました。

『やあ繩付がにげた』

『谷底へ轉げ込んだ』

と不意にやられ者共は今更扶けん術もなく、松明ふりかざして谷を望んだが深い谷であるから皆暗見えませぬ。

『兎に角探して見やう』

と幾手にも別れて探したが中々知れませぬ。

擬松木は思ひ切つて谷へ飛び込みましたが、孝子を天の助け給ふにや身に疵もつけず繩はとある木の梢にとひつかかりました之れ幸ひと力を込めて繩をひきちぎつて宙から飛下り、岩角にて繩のいましめをすり切つて自由な身となりましたが、上を見れば幾十人の者が松明をふりかざして右往左往としてゐる、此者年若けれど心したゝかものでありましたから、泥を取つて顔へなすり、細い山路へと路を求めて這ひ上り自分も一本の松明を取つて一緒に探すやうな振りをして騒い





でりました。

「これ丈け見てもわからぬならもうだめぢや、夜陰の谷間など探してわかるものぢやない、あの深い谷へ轉げ落ちたなら泥棒の身體も粉微塵ぢやらう生きてゐる筈がない、探すのは明日にせやう」

と口々にいひのゝしり家路へと引き返へしました、松木も此群に混ざれ込み同じ敵の家へと這入りましたが、人々ががやぐいと騒いでゐる内にこつそりと床の下へと潜り込みました。

主人は谷間へ落ちた事を聞いて。

「あの谷へ轉げ落ちたのなら生命はなからう、よし生命は助かればとて大怪我をしたであらう、皆々は寝るがよろしい」

と自分も臥床に入りましたを、よくよく見すかし、十分に家内中が寝入り込む時刻を待つてゐましたが、頓て疲れに家の者共皆深い睡りに陥り正體もなくなつ



了しましました、時刻じこくはよしと松木まつぎは床ゆかの下したから這出はたし、前後ぜんごの様子やうすをよく窺うかがひ、これなら大丈夫だいぢゆうぶと、床下ゆかしたでよく窺うかがうて置おいた主人おんぢの寢間ねまをさして忍しのび行ゆきました。かゝるべしとは夢ゆめにも知らぬ主人おんぢは、自分じぶんの傍かたはらに女おんな二三人にんさん添寢ひんねさして、いぎたなく寢込ねこんでゐるを見て。

『今度こんどこそは見事みごとしとめるぞ』

と松木まつぎは枕頭まくらもとにある刀かたなを奪うばひ取り、引ひきぬいて眞向まっこうにかぶり。

『亡父ちちの恨うらみ思おもひ知しれや』

と熟睡じゆくすいせる細首ほそくびと切きれば、迸ほとばしる血汐ちしほと共に首くびは宙ちゆうに飛とびました、今いまの太刀たち

音おとに添寢そひねの女おんなは眼まなこを覺さまし。

『あれい』

『人殺ひところし』

といはしも果はてず返かへす刃やいばで女おんなの細首ほそくび落おし。

『騒さわげばかりだぞ』

と残りのこの女おんなをおどかす、と、女共おんなどもは腰こしをぬかして慄おそえ座まはつて言葉ことばも出でませぬ、

今いまは用もちなしと血刀ちまたなひつさげた儘まゝ戸障しやうじ子をあけ放はなつて出でかけると。

『やあ盗賊たうぞく』

『逃にがしはやらぬ』

と二人ふたり許ゆるり槍やりをひねつて追おつかけて來きました。

『邪魔じやまだ立てひろぐな』

と忽たちまちの内に二人ふたりを切殺きりころし、無益むえきの殺生せつしやう要ようなしと、血刀ちまたな振りつゝ逃にげのびまし

た。

これこれで首尾しゆびよく父ちちの敵かたみを取とり、此この由訴よしうたへて舊主きうしゆ朝倉あさくらに歸參きんぜんを願ねがひ出でましたら、

『年としに似合にあはぬ健氣けんけいな振舞ふるまひ、天晴物あはれもののやくにたつべき若者わかものぢや』

と其儘そのまゝ引立ひきたてられて父ちちの名跡めうせきをついで其家臣そのかじんの内うちに加くはへられました。



鷹の大根を有難候

世は太平に馴れて武士にも阿諛ものが多くなつた、徳川幕府のある時代に、天野彌五右衛門といふ正直無類の勇士がありました、此男少しも嘘いつはりといふものが云へぬ、眞法正直でやつてゐましたから他人のいへないことも構はずズン云ひ切りました、夫れがため往々他人から憎みを受けることもありましたが、

『自分は正直にいふてゐるのぢやから、誰憚る所もない』

と構はずやつてゐました、三代將軍家光公の時でありました、其時分の習慣しで將軍が鷹野へ出ると其鷹野の獲物をば御馳走して下さる、彌五右衛門も其御吸物を頂戴する光榮に浴しました。所が御吸物を頂戴した翌日は必らず老中へ御禮を述べに参らねばなりません。

『昨日は見事な御鷹の鳥を頂戴致し有難き旨に存じまする』

と老中を一顧御禮廻りする習慣になつてゐました、彌五右衛門例の氣性だから登城して御吸物頂戴の翌日式の如く老中廻りしたはよいものゝ、口上が一風變つてゐました。

『昨日は御鷹の大根を澤山に頂戴して有難く存じます』

といつて廻りました、老中邸にては取次の者がおかしい事をいふ哇と思ひながら、本人のいふ事でありますから其通り日記へ書き認め置きましたが、其頃智恵伊豆とて有名な松平伊豆守は不圖其日記を見ておかしき事ぢやと不審し、ある日殿中にて彌五右衛門に出會つた折。

『これ、彌五右衛門、先夜御鷹の鳥を下されし折、其許は御禮廻りを致し、御鷹の大根と申されしは如何なる理由か、鳥を下されしに大根の御禮を申すとは何か所存あつたるか』

彌五右衛門此所ぞと許り。



『いかにも大根の御禮を申しました』

『其仔細は』

『大根を頂戴しましたから大根の御禮を申しました、御觸には鳥を下さる様にあ  
りました、頂戴仕る時は鳥は一つも下されず、大根ばかり澤山下されました  
から。大根を頂戴しましたと御禮申上げたのでござります、併し鳥を下さるとい  
ふ御觸に大根の御禮申上げて相濟まぬといふ儀にてもあらば、鳥を下さる旨を御  
觸状へ認めたる者と大根を盛つたものと突き合はして御調べ下されば眞偽明白  
になりまじやう、我等に於ては大根許り頂戴致せしに相違なき故、大根の御禮を  
申上げたのでございます』

と直言其儘にいふた、流石智恵伊豆も何と咎める言葉もなく黙して濟された。  
然る内に例の吉良上野介淺野内匠頭の刃傷事件が起りました、變り者の彌五右  
衛門であるから淺野家へ見舞に行かて吉良家へ行きました、上野介の方は諸方か

ら嫌はれてゐましたから見舞客が少ない、其所へ彌五右衛門が見舞ひに来たので  
ありますから、大に喜び對面しました。彌五右衛門申すには。

『貴殿昨日殿中に於て淺野内匠頭より切掛けられしに、烏帽子の輪金で刀が止ま  
り、淺疵で済んだ様に承るが、其烏帽子を見せて頂きたい』

『ハイ、何か御覽下さい』

と大喜ひ自慢の體で烏帽子を持つて來ました。

『此烏帽子でございます、若し輪金の銀がよくなかりせば頭を割られてゐたでござ  
らうが、幸ひと』

『ふむ、此烏帽子がなかつたら貴殿の命はなかつたのぢやな、烏帽子は生命の親  
ぢや、大事になされ、は、は、は、烏帽子で生命を助けられた武士は貴殿一人でござ  
らう』

と罵り捨て、歸りました、始めは御見舞に來てくれたと喜んでゐたが、之れぢ



や耻をかゝしに來たのであります、厭々しいと思つたが彌五右衛門の云ふ如く、武士の身に取つて武藝で敵を押へずに烏帽子で助けられたは自慢になりませんか、吉良上野介も口を尖らかして其儘に泣寝入りになりました。

或る日彌五右衛門家の者呼んで、『近日夜分になるに空が低く星が近々と見えるが、斯様の折にはよく大地震があるものぢやから用心せい』

と鏝の大なるを十本許り調へさし、屋敷の内外を見廻りながら。

『彼所が不用心ぢや打て』

と之れはと思ふ箇所々々へ鏝を打たさし、其外若しもの時の用意を夫々命じました、子息や家族の者は。

『お年の加減で老耄なされたと見える、地震の用意などをさても埒なや』

とひそかに嘲り笑つてゐましたが、怖しきものなる哉、兩三日過ぎると大地震

があつてお城や大小名の屋敷町家に大分澤山な損じや怪我人がありました、彌五右衛門宅許りは豫ての用心のため何等の損じもなかつたさうであります。

老力士十右衛門

土岐山城守といふ大名が、此人到つて角力好きで、其角力好きが嵩じて當時關西第一の名譽の相撲伊郷十右衛門を召し抱へました、伊郷十右衛門は關西に於ては彼れに並ぶものなしといふ、力士で十番が勝負を十番共に勝つ、主人の山城守は之れが嬉しくて十右衛門でなければ夜も日もあけぬといふ騒ぎ方、併し力士は盛りの短いものでありますから、十右衛門も老る年に若し不覺の負けを取つて今迄の盛名を汚がしてはならぬと思ひましたから、後には力士はやめて普通の家臣並に召抱へられて使番をつとめてゐました、何分強い力士であつたから身體も立派であるから使番としても見事なものであります。

其當時は大抵の大名も皆角力好きで、肥後の細川越中守も其類ひに洩れず、撞



鐘何某といふ抱力士が有りました、之れ程の好み故時々屋敷の内にて力士を集めては角力を取らして見物になるが、或る日山城守へも態々招待の使ひが参りました。

山城守好きの道とて見物に参りたいは山々であるけれど、折しもの病氣で病床を離れる譯に参りません、それで十右衛門を召し寄せ。

『今日細川家より角力の招待を受けたが、彼屋敷の角力故定めし晴れの物と存ずるが、此病體では如何に好きでも見物がかなはぬ、夫れに就き汝は我名代に参り角力の勝負をよく見届け、一々控へ來つて我病床の慰めとなしてくれ』

と命じました、十右衛門早速承つて直様細川屋敷へ参り。

『今日の角力御招待につき、主人山城守日頃好める道とて是非参りたいとは存じますが、折ふしの病氣に床を動く事出来ませぬば、それがし名代として見物仕り、勝負の始末を一々書きとめて主人に聞かしたる御座います』

と述べました、細川家にてはそれは近頃の御執心、よく御覽下されと席を取つてくれました、此日は果して晴の勝負とてよりすぐつた力士許り出て、何れも必死にもみ合ひまして面白い勝負が數番ありました。なれど見受ける所細川家の抱へ角力撞鐘が一番強さうで。

『流石御當家の抱へ力士丈けあつて今日の力士中第一の強い力士ぢや』

ときまりました、所が此日集まる程の見物客でありますから、皆十右衛門の前身を知つてゐます。

『あの土岐家の使者で來てゐる伊郷十右衛門、あれは以前開えた力士ぢやつた、如何に年を老つたとてまだ強からう』

『いや、力士の強い壽命は短いものぢやからもう駄目ぢやらう』

『如何に年老つたとて昔は鳴らしたものでやから、さうむざとした事もなからうぞ』



「物も試しにあの撞鐘と一番取らして見たら面白いではないか」  
「どんな角力を取るか之れは近頃の見物ぢや」

こんな話がちらほら出て、さる大名から細川家へ話があつた、何れも之れは妙案となつて、改めて十右衛門に。

「卒爾ながら、さる大名衆よりのたつての懇望で御座るが、一つ昔取つた杵柄で一番勝負を見せて貰いたいのぢやとあります」

「いゝゝ今日は使者の事なれば」  
「いや夫れは心得て居ります、使者とて角力を取れぬ譯も御座るまいし、貴殿も

以前は鳴らした力士故、是非勝負振りが見たいと列座の大名衆の懇望なれば、たつて承引願ひたい」

「御言葉は有難うは御座れど、何分老る年は五十歳、以前の様に手も足も利きませぬから平に御容赦」

こんな押問答を當主細川越中守が聞かれて。

「之れは面白い注文ぢや、是非越中が見たいと申して取らせい」

ときつい好みに十右衛門今は辭せん言葉もなく、よんどころなくお請をして、供の僕に申付け純子の下帯取よせ、支度をして土俵の上へあがりました。

「やあ十右衛門が出たぞ」

「併し年を老つたな、昔の元氣も面影もなくなつてゐる」

「あれではとても物になりますまいか」

「併し腕に覺えのものでござるから」

と衆評區々の内に相手方の撞鐘も土俵に登りました、撞鐘は今血氣盛りの廿四

五歳の元氣が張り切れさらな力士であります、此方の十右衛門は今申す五十歳の老人、股の肉も落ち、腹の皮はたるみ、胸も瘦せて見る影もないから、折角所望した大名衆にも落膽した人がありました。



『これは駄目ぢや、から變り果てゝはだめぢや』

『撞鐘とは比べものにならぬ』

『老人によしなきことを所望して氣の毒な事になりおつた』

と眩く聲も聞えませんでした、然るに行司現はれて軍配をかまへて、機合すると見ると引きました、兩力士はがつきと組んだ。

『残つた〜』

『ふむ老人なかく味をやりおる哇』

『けれど若い者には、第一氣力が衰へてゐるから今にやられるだらう』

双方互に採み合ひ、また離れて突き合ひましたが、いかなる機にや十右衛門やつと聲をかけながら満身の力をこめて、物も見事に撞鐘を仰向けに投げ倒しました。

『やつた〜』

『豪い老人』

と見物はやんやといふ、然るに撞鐘は血迷うたか、むつくと起き上るや砂まみれの儘、又も十右衛門に組んでかゝりました。

『之れは亂暴だ』

『之れは無茶苦茶だ』

『撞鐘は何したのか』

行司は中へ飛び入つて引き分けやうとするが、撞鐘は承知せぬ。

『ウヌ糞』

と怒氣に任せて十右衛門をグン／＼押し倒さうとします、十右衛門之れはと一時たぢろいたが、又も沈着いて力に任せて押進み來る敵を、見事につまどりといふ手で土俵の外へ投げ出しました。

『やあ又やつたぞ』



見物は更に喝采しました、越中守も十右衛門の非凡の働きに感じ入られて、翌日使者を以つて白銀十枚時服五襲を與へられました。  
十右衛門は追々出世して、末は元締奉行迄果進したさうであります。

一丈三尺五寸の大槍

天下分目の大合戦關ヶ原の戦争がすんだ後、本多豊後守康重と申す大名が一筋の大身の鎧を携へて、越前の大守結城三郎秀康の所へ尋ねに参りました、此秀康といふは徳川家康の息子で中にも勇武絶倫の譽れある荒大將でありました。

『今度は戦も首尾よく勝利となり祝着に存じまする、就きましては失禮ながらそれがしより此大身の大鎧一筋を献じましたい。』

此鎧こそはそれがし若年の頃より持ち馴れました鎧にて、此鎧先にて數多の敵を仕止めました、就中元龜元年、姉川合戦に於て手柄を現はして褒状を賜り、同三年味方ヶ原に於ても首級を得、天正三年の長篠の役にては高巢山に先登して敵

を斃すこと數名、同九年高天神にては敵の首二十一を取りました、小牧の役にても相當の手柄あり、長久手の合戦に於て敵の首首十六を取つて此鎧に結びつけて檢分に供したといふ名譽の鎧でござります、此鎧はそれがし戦功に一として與らぬものなく、又尋常の鎧の如く敵を刺す要はなく、敵の群集中へ此大身の鎧を振り廻して薙ぎ倒せばよろしいので、尋常の鎧とは違ひます、之れでそれがし一命とも存ずる鎧にて、長年持馴れましたが今は老年に及び少々持心がそれがしに取つて重過るやうに存ぜられます、さればあつて用なし納めて置くは惜し、といつて見渡す所之れ程の大鎧提げて戰場へ望まれん程の剛勇の仁は、不敬の至りながら秀康様より外にありとは見とめられませぬ、失禮ながら此鎧お譲り申したいと存じて推參致しましたが、お受取り下されまじやうか』

戦功莫大の鎧を譲らうといふを、勇武の大將が何辭しませう。

『有難い、果して我力が足下と同じ様にあるか知らぬが、折角の厚意ぢや受けて





子孫に迄傳へ申さう』  
 『これは痛み入つた御挨拶、結城様にお渡し申さば此大身の鎧も本望に存じまじやう』

と本多も喜び勇んで歸りました、此鎧は穂の長さ四尺五寸あり柄の長さ九尺合せて一丈三尺五寸といふ大きな鎧でありました、秀康之れを一子忠直に譲り、忠直は大阪陣の戦ひに大功を現はしました、忠直後年に至り亂行あり越前を没收され、一子仙千代丸が越後高田城主になりました、仙千代丸は光長といふ名であります、光長から其子松平宣富に此名譽の鎧は譲り渡された、宣富は平日の持鎧にも之れを使ふたが何分とも一丈三尺五寸といふから重きこと並大抵でなく普通の鎧持では持ち切れません、幸ひ宣富の家來に蘆田勘助といふものがあつて大力三人位の力量を備へてゐましたから、此大身の鎧持を承はり、暴風の日でもものつしものつしと歩きましたから、あら當代の見物よと評判になりました。



然るに勘助次第に老年に及びました頃、つらく考へるに此大鎗は普通の者では持てぬ、少し位の力自慢の者では持て餘して時には不慮の失態を生ずるかも知れぬ、又當殿が此鎗を戰場へ持ち出でられたとて、前の持主の如き剛勇天下に隠れない大力量の方なら縦横に振へやうが、普通の力しかない我殿では却つて大鎗が荷厄介になつて、不覺を取らるゝ基になるかも知れぬ、平時には鎗持を憚まし戦時には殿の不覺の基たるべき鎗はたとへ天下有名の鎗とてお家に禍ひする、之れは柄を短く切つて平時戦時共に持ちあつかひよくするに越した事はない、さすれば入つては持鎗出でゝも持鎗として立派な功を立てる、今勘助老年にて此上の奉公は長くはあるまい、奉公終に此鎗短かうして後來の爲めに致さうと石突の上より三尺許り切り取つて、之れでよしく、併し御家の重器を臣下の身として勝手に損ぜし罪は自ら處分せねばならぬ、武士は固より一命投げ出したもの、いざさらばと、腹一文字に掻き切つて自殺しました、一通の遺書に鎗を短くした理由

と其罪をせめて自殺した事が認めてありました。

此弟子に此先生

熊澤蕃山といふは徳川の初め頃の學者として政治家として豪い人物でありました、少年の頃から他人より勝れてゐました、年十六歳にして備前岡山の大守池田光政に仕へました、此岡山侯が又豪い人物でありました、でありますから蕃山も思ふ様に腕が振へて色々の仕事をしました、まだ二十歳の折に不圖思ひまするに、自分は年の若い割によい役がついてゐる、之れは他人から恨みを買ふ基である、其上自分はまだ文を學んでならず武を學んで達せぬ未熟者である、然るに身に餘る祿を頂戴してゐるは誠に恥入る次第ぢや、之れは少時お暇を頂いてよく文武の道を學び、然るべき師匠を求めて勉強して一廉の人間になつて歸つてから再び奉公するが本當だと、此由を主公光政公に告げると早速承知になりました。



其所で藩山は岡山を立退いて京都へ参りました、如何なる先生に  
ついたらよ  
ろしからうかと考へてゐる折、ある日加賀から来た飛脚に逢ひました、其飛脚が  
面白い話を聞かしてくれました。

『いや何も此間はゑらい目に逢ひましたぞ、藩金二百兩をこづかつて國許を出  
ましたが、江州草津へ来る迄は何事もなかつたが、草津で馬を雇ひ之れに乗つて  
やつて来ました、さあ天氣はよし、氣持もいゝものですからつい馬の上でうとう  
とやつて了りました。漸く宿へついた時馬子に起されて、へい着きましたぞとい  
はれて吃驚して眼がさめ、賃金を拂ふて早々宿へ這入りましたが、外の荷物は  
運んだのでしたが、肝心の二百兩を馬の鞍にしつかと縛りつけた儘であつたのを  
つい寢惚けて忘れて了りました、あの二百兩はと氣がついた時はもうおそい馬子  
は遠くへ歸つて了つた跡で、いくら追つかけても追ひつきことはありません、一體  
あの馬子は草津から乗せたが、草津の者か何だか判りません、ですから草津へ引

き返へしても無駄な話、殊に馬子に二百兩、今時分何所へ行つてゐるか知れませ  
ん、と申して此儘打捨て置く譯合の物ぢやありません、苟にも二百兩殊に藩の  
金ですから並大抵な訛が通るものぢやない、不覺に居眠つたが此方の罪、誰恨む  
事はない、皆自ら招いたものぢや、仕様がな切腹して申譯ぢやと、厭々ながら  
刀をぬいて、切腹しやうとすると、

宿屋の表を割れる様に敲くものがあります。

自分も聞耳立て、切腹するのを見合はしてゐました、すると何でしやう、其表  
をたゝいてゐるのは今の馬子でした、二百兩といふ大金が馬の鞍にあつた事が氣付い  
て夜道を取つて返し私の手許へ届けに来てくれたのです、私は生命を拾つた喜び  
本當に生命拾ひしたのですから、何とも申されぬ嬉しさ、さるにても馬子にも似  
合はぬ潔白の人と存じながら、禮心で甘雨をさいて之れは御禮だと與りますと、  
驚いた事には其馬子はつゝ返へします、何いふ譯だといふと、自分の村に中江藤



樹先生といふ先生がゐらつしやる、此先生がいろく爲めになる事を教へて下さるから、近所の村の者は皆人間の道を知つてゐます、されば自分の村の者は道に落ちたる物は拾はず、故なくして人より恵みを受けず正直眞法を道としてゐます此金もお前様が忘れて置かれたをお氣の毒と存じて返へしに來たので、お禮の金がほしかつたら最初からお返しにも來ますまい、折角のお志なら此金を此所迄持つて來た駄賃として錢三百文だけ貰ひまじやうと、馬子にも似合はぬ立派な心掛け、私はもう感心して何とも申す言葉も出ませんでした』

と語る話を聞いて蕃山思へらく、此藤樹先生こそ我師と頼むべき人物ぢや、よい事を聞かしてくれたと、早速旅装を整のへて藤樹の村近江高島郡小川村へと参りました、見た所小さい田舎家でありますすが掃除は行届いて人柄が慕はれます蕃山は案内を乞ふて弟子にしてくれと頼みました、藤樹は、

『自分は學も徳も低いもので、到底他人の師匠となり得るものでありません』

と断はります、それでも頼むけれど聞き入れず、びつたり柴の戸を閉ざして受けつけません、併し蕃山は此人を措いて我師事すべき人物はないと思ひ込んだものでありますから、藤樹の家の軒に座つた儘一日經ち二日經ちますれど立ち去りません、藤樹の母が之れを見かねて藤樹を説いて。

『お氣の毒ぢや、あれ程御執心のを入れてあげぬは頑過ぎる』

と取なしてくれました、藤樹は至つて親孝行の人でありましたから母のいはれる事なら何事でも聞く、母の取なして、漸く蕃山も藤樹の門に入りて教へを受け、る事になり、日夜孜々汲々勉學の末立派な人物となり、再び岡山へ立歸り廿二歳の時三千石の祿を賜はつて國老の席に連りました。

**荒馬鬼鹿毛と達人の馬丁**

江戸愛宕山の險しき石段を馬上で上下した馬術の名人曲垣盛澄の事は講談杯で世に傳はるが、之れが實録を語りまじやう、曲垣平九郎盛澄は讃岐高松の城主生



駒壹岐守の家来て寛永年中の人でありました、曲垣平九郎生れながら馬術の名人で生駒家では右に出る者が無い、けれど人間は到つて疝癰の強い男で殊に大酒を好み二升三升はペロリとやる、夫れで性來吃と來てゐる、平九郎卅五歳の春を迎へました。

「先生一つ御内儀をお持ちになりましたら」

「いゝゝいかん」

「へエ、併し何時迄も御獨身では御不自由で」

「不自由はえゝ、おゝ俺は酒があれば、ふゝ不自由はかまわん」

「左様でございますかいな」

「おゝ俺の様な、酒飲みで疝癰の強いをゝ男の所へ、むゝゝ娘をくれるおゝゝ親はないぞアハ、ハ、ハ、」

こんな工合でありますからいゝ年齢でゐながら女房がありません。先生結局氣

樂として衣服の事も住居の事も構はず萬事酒々と酒許りに浮身をやつしてゐました、然るに平九郎が名譽の馬術を示すべき時節が到來した、それは時の將軍家光が寛永十一年正月晦日に芝増上寺に於て先代秀忠の法會をなし、其歸りに愛宕山の下を通行したが、不圖山上を見上げ。

「あれなる梅花を一枝手折もて來よ、誰かある馬にてあの阪を驅け上らせ」

と命を下しました、將軍の命なら水火も辭することはならぬ、はつと許りに近

臣は承つたが、扱誰れを此役を命じやう、といふは愛宕山に切り立つたやうな

百數十段の石段がある、將軍は其石段を馬にて驅け上れと命ずるのであります、

固より武を貴ぶ當時に之れ位の難命を出されても仕様が無い、さりとて切り取つ

た如き險しき石段を誰が馬上で驅登り得られまじやう、誰も彼れも顔見合はして

もぢく致しゐると、荒氣の三代將軍赫と怒つて。

「之れ程の事を仕遂げる者はないか」





と以つての外不機嫌、今は猶豫はならじと、伴につらなる旗下の士で剛氣の者つと進んで馬を驅けられたが、尋常ならぬ切所でありますから、二三十段登ると馬諸共眞逆様に轉げ落ちます。

『それがし参らう』

と生命知らずに飛び出すものが皆轉び落ちる之れではならぬと役人共額を集めて相談しました。

『並大抵の馬術者では出来ない藝ぢや、餘程勝れた器量を持つてゐる仁でなければ此役目は務まり切らぬ』

『誰かないものか』

『誰かありさうなもの』

と考へてゐる内に生駒壹岐守の家來曲垣平九郎なら首尾よく勉まらう、此の由將軍家へ申上げて見やうと、恐るゝ近付き、



『案外の切所にて容易に仰せを遂げまする者がござりませぬ、此所に今日お伴を致しまする生駒壹岐守殿の家來曲垣と申す馬術家がござりまするが、此者ならては御用はつとまりかねまする』

『よろしい壹岐を呼べ』

家光は生駒壹岐守を呼んで。

『其方の家來に曲垣といふものがゐるさうちや、あの石段を登らせ』

と命じました、壹岐守畏まつて急使を馳せて曲垣平九郎を招き委細を告げると

平九郎莞爾として。

『御命令承りました』

と壹岐守の愛馬黛といふ名馬を借用し、静々と乗り出して輪乗りを五六度致したる後、馬の足を早め石段に乗りかけしと見るや。

『ハイヨー』

の勇ましき掛聲と共に、馬は見上る石段を風の吹きあげる疾さでのり登げた。

『あれ見よ、名譽の馬術』

と人々聲々を揃へて感心した、曲垣平九郎盛澄首尾よく山上へ乗りあがるや、馬より下りて社殿に向つて三たび拜禮し、境内の白梅の一枝手折り之れを腰にさしはさんで再び乗馬し、さしも險しき百數十段の石段をあぶなげもなくおり下つて、將軍所望の梅花を獻つた、馬術の妙といひよき武士らしき振舞に、家光大に氣に入つて直に時服一襲と黄金三枚を褒美に與へた、此事あつてより平九郎の名は一時に揚り、

『生駒殿はよき侍を持たれた』

『曲垣を抱へる事が出来ねば、せめては家來をあの門弟にして馬術の奥義をきめ

さしたい』

大名小名旗本迄は一時に平九郎の馬術に眼をつけ出しました、苟にも武道に



志ある程の者は皆曲垣の門下になりたいたいと押かけたから、平九郎は俄に弟子が増えました。

よき事の後は悪い事がある、平九郎の名も門も榮えて目出度いと思つてゐると、突然な事が生じました、夫れは主君生駒家の家老生駒將監同左近前野主膳などがお互に勢力を張りたがつて家中がもめて、夫れが末は不始末が將軍家へ聞えて到頭一家改易を命せられ、讃岐高松十八萬石を召上げられて、出羽の國で一萬石を下され壹岐守は官名をもとられて従五位下侍従に落されました、之れが爲め一家は散々になり従つて曲垣平九郎も永の暇となり浪人の身分となつて了ひました。

當時の侍氣質として忠臣二君に見えずといふ事が信じられてゐましたから、平九郎は容易に主人を取らうの氣もない、其上後儘氣儘者であるから浪人の方が樂だと、金のある間は好きな酒を飲み、金がなくなれば馬の賣買の中に這入つて馬

を世話してお禮い貰ひ、こんな事をして日本六十餘州を廻つて尾張名古屋へ來たとき鏢一文もない程貧乏になつてゐました。

此上は食ふに困るから丁度尾州家の馬丁にあきがあつたから名前を隠して馬丁に落魄て棲み込みました、露には曲垣平九郎盛澄といへば將軍のお目にとまつた名譽の侍も、今は尻切袴天の馬丁になり下つた、けれど呑氣な平九郎は平氣の平左であります。

『堅くるしい事をしてゐるより此方が結局氣樂ぢや』

とごろ／＼してゐました、尾州家に鬼鹿毛といふ名馬がある、名にし負う荒馬とて誰一人乗りこなすものがありません、或る日尾張大納言件の鬼鹿毛の事を思ひ出されて。

『彼馬は將軍家から拜領の名物ぢや、一度乗り試みさしたい』

と馬の師範役を呼び出し乗り試みよと命ぜられた、承つて候と鬼鹿毛に飛び



乗つたが、荒馬の事とて驀然に駆け出し手綱を振りちぎつて到頭乗手を地上へ振り落した、夫れのみか荒れたる餘勢に乘じ恐れ逃げ迷う人々を蹴倒し踏倒して東西に奔しります、あれよくと人々口にする許りで誰一人飛出で荒馬を止めるものがない、此時曲垣平九郎見るに見かねて躍り出ました、奔り來る鬼鹿毛の前に大手を擴げてつゝ立つと、馬は怒つて蹄にかけんとす、平九郎さしつたりと身をかはずやひらりと手を伸べ鬣引つかむや馬上へ飛乗つた、すると今迄荒れ狂ふた荒馬も名人の手には敵はぬと見えて俄に静り返つて其儘足搔を止めました、

これを見たる大納言始め一同の者共感に打れて。

『あれは何者ぞ』

あれ迄も荒れ狂ふた荒馬を手もなく乗り静めた名譽の者はと見ると風體は並の馬丁でありますから益驚きました、大納言は早速之れを近くに召寄せ仔細を聞

くと、成程上手なも尤もなり、曾つて江戸愛宕山に於て馬術の名譽を現はせし曲垣平九郎盛澄なりと知れ、こはよきものを得たりと、其儘召し出して八百石の祿を賜り平九郎茲に尾州家の馬の指南番となりました。

加賀の名物男

維新前の事でありませすが加州金澤藩に脇坂七兵衛といふ豪傑が居りました、正直眞法の人物で曲んだ事は兎の毛も容さぬ、到つて節儉家で平常は縞目もわからぬ程繼ぎの當つた着物を着て、草履は長刀の様になつたを履き粗末至極な風體をしてゐるが、腰の刀は稀代の業物を挟み劍術槍術は奥義を窮めて、武士の心得ふべき武術は一寸肩を比べるものがないといふ位に達してゐました、つまり其頃に武士は一體に懦弱になりて武術を他所に婦女子の如く身装許りをかまつてゐるを慷慨して態と自分は粗末極まる風装をして構はずに大道を濶歩してゐたのであります、斯いふ人物であるから一風變つた所行が澤山あります。



當時藩に於て世の中が開け行くについては西洋の操練もやつて置かねばならぬといふ事になり、壯猶館といふを設け、藩の侍は老少を問はず此所に於て洋式の操練をさしました、日頃より武術の稽古が好きなき七兵衛の事でありましたから他人より先きに入館して稽古をする事になりましたが、或日操練の教師が生徒の歩き方が違ふとて大層生徒を叱りつけ、

『斯いふ風にやるのだ』

教師自身が歩いて見せた、すると例の七兵衛飛んで出て豫て用意してゐた曲尺を懐中から取り出して、教師の歩く寸法を取つて見ました、如何に先生だとして歩一歩同じ尺度で歩けるものでない。

『先生の歩方も區々ぢやござらぬか』

七兵衛は皮肉をいひました、之れは教師が餘り剛慢で生徒を厳しく叱りつけたから返報をやつたのでありますから、生徒一同は先生の弱るを見て、やつと溜飲

を下げて、之れから七兵衛の評判が甚だよろしい。

七兵衛の履物といふのが又た大變なものでありました、であるから若侍は面白がつて夫れを隠します、草履が紛失する度に七兵衛は生丁面に書面を以つて草履一足紛失の届出をします、役人は五月蠅つて、

『草履一足位にさうやかましろ一々届出られては手数で困る、一體草履の紛失は其許の不注意から生ずる儀である、當方の差構うべき筋でない』

きつぱりいひ渡した。

『然らば此方に考へがある』

其後は七兵衛は草履を脱ぐ度に藏の大きな錠でおろし、其錠を腰にさげて操練の稽古をしてゐました、其草履といふは赤い布で鼻緒を上げた汚ない草履で、其草履に大きな錠がおろしてあるのだから見る人は皆不思議がりました。

或年殿様が京都へ上られるについて七兵衛もお伴を命ぜられました、然るに此



行列の中に七兵衛の風が一段と變つてゐるで皆がくすくす笑ひます、横目付の役人が到頭見かねて七兵衛に注意しました。

「貴殿のあの笠は困るな」

「何故お困りでござりませう」

「貴公の笠といふは椀や合羽で綴り合はした三四尺もあるといふ大笠ぢや見ともないではないか」

「これは異な事を承るもの哉、當藩に於ては笠の寸法をお達しになつて、斯々の大きな笠は罷りならぬとお達し相成りましたか」

「それはない、けれど」

役人は一本やりこめられたが、其儘にしとく譯にいかぬから、

「貴公の笠は大き過ぎるから、行列に當つて隣近所の障りになり、自然行列が亂れる事になる、今少し小さい笠に改めて貰ひたい」

「成程笠大きくてお行列の亂れになつては拙者も残念でござります、委細承知しました、明日より小さく致しまする」

やれく有難いと思ふてゐると、翌日七兵衛の笠を見るとは如何に、昨日迄の大笠は廢したれど、今度は馬提燈の小笠を外して夫れに紐をつけ、チヨコナンと頭上へおせて濟した顔をしてゐる。

「七兵衛殿の笠を見い」

「昨日迄のは餘り大きかつたが、今度のは餘り小さい」

皆指さして笑ひます、行列の邪魔になるといけないとて小さくされたのであるから、行列の障りにならぬ笠は小さ過ぎても小言はいへない、役人共も咎めやうなく、

「七兵衛の事はもう構うな、下手なことはあの男にいへないから」  
此様な男であつたが七兵衛に一人の娘がありました、此娘磨かざれど玉の光り



輝く器量よしで、鬼の七兵衛に佛の娘が出来たと評判ある程の美人でありました  
従つて諸方から縁談の申込みがあります。

『お宅のお嬢様は御嫁におあげになりませんか』

『先方は斯々で』

色々と話があるけれど一つも七兵衛の氣に入る先きがありませんから、

『折角ですが、まあお断り致します』

と許り拒絶してゐました、所が一人口の巧い媒介がやつて来て。

『お宅のお嬢様をお嫁に頂きたい、當方の望みは外にありません、衣類調度がど

うのかうのでありません、位地役柄が何であるとも申しません、裸體の儘で結構

でございます、唯脇坂七兵衛様の御令嬢を頂きたいので』

『ふむ、裸體の儘でよい、唯七兵衛の娘だから貰ひたいと仰有な』

『左様で御座います』

『よろしい差上げまじやう、外から澤山縁談沙汰もあつたが、貴方の様なわかつ

た話はなかつた、今の一言が甚だ氣に入つた必らず貰つて頂かう』

大受合ひに受合つたから媒介先生大得意で婿の方へ話をした、婿の方も脇坂の

娘の器量よしに眼も鼻もないのでありますから大喜びで承知し、結納も相手が七

兵衛であるから至つて質素に而し儀式正しくして遣りましたが、七兵衛の方から

一向返しがありません、扱其内に婚禮の式日となりました。

婚禮の當日になつたから婿の方では座敷を飾り衣服を改めて待ち受けてゐると

七兵衛は平常着の儘で、平常着の花嫁をつれてやつて來ました、如何に構はず屋

でも之れは酷いと思つたが、七兵衛いふ様には。

『此度の婚禮誠に祝着でござる、殊に七兵衛の娘なら裸體でもよいとのお言葉は

冥加至極に存ずる、されど若い女の事故眞逆大道を眞裸體といふ譯にも參らぬ故

平常の着物を着せて參りました、此上は何卒約束の如く裸體嫁を差上げる故、着



物はお返し下され」

婿方への土産物は愚かな事嫁の着てゐる着物をも持つて歸るといふ、婿の方では呆れましたが、段々聞いて見ると媒介は裸體の儘でといつて約束したのでありますから、これは七兵衛のいふ様にしないとあの一酷者ぢやから何を致すも知れぬと、七兵衛がいふ儘にして婚禮の式を了へました。

日も経つて嫁の里歸りとなりました、其時婿の方も媒介の方も前回は凝りあげてゐるから、態々申し出た。

「先達ては儀式萬端の事成る丈け質素に致し、無駄づかいは萬事無用とは申しましたれど、何分一生一代の事でも御座いますれば、里開きにはせめて赤飯でも婿の方へお送り願ひたい」

「いやそれは態々の御挨拶、七兵衛も可愛い娘の事故心の限りに盡さんと存じてゐましたが、先方が御心配御無用とありましたから萬事手輕にしました、よろし

い赤飯の儀はしかと心得ました」

之れで今度は安心だと媒介もほつと息つき、あの節險家の事であるから定めてしよんぼり配るだらうと思つてゐると、なか／＼何して七兵衛は出入の餅屋に命じ赤飯三石餘りといふを蒸して大八車數輛に載せて、

「へエお目出度うございます」

と婿の家へ運ばした、三石餘りの赤飯といふ饒山な送り物に婿も媒介も、

「これは／＼」

と呆れる許りでありました、扱月日も経つた後、夫婦の仲よろしきを見て七兵衛も安心し、或日尋ねて参り娘の前に三百兩といふ大金をずらりと並べました。

「時に此金のお前の嫁入の仕度金として豫てから別に取つて置いたのぢやお御當家に於ては其方をやる折に、衣類調度は不用とあつたから此金は手もかけずに置いて置いたが、肝心其方も片付いた上は此金は俺の手元にあつても如何ともする途



がない、汝の小遣にして何なりとも然るべき途に遣ふがよろしからう』  
と惜氣もなく三百金を與へました、當時の風習によれば七兵衛位の身分の者が娘をやる仕度金は多くて二百金まづ百金位の所でありました、此前後の話が夫れから夫れへと傳つて。

『七兵衛殿は流石豪い男ぢや』

と一藩の賞められ者になりました、然るに此親にして何してあゝいふ子息が出来たか五太藏といふ息子が至つて遊蕩好きでありました、堅くるしい親爺の目を忍んで花街通ひをしてゐましたが、或時貸座敷の勘定付けが五太藏の手に渡らで七兵衛の手に渡つた、七兵衛は之れを見るや何にも云はず、直に古道具屋を呼んで諸道具の賣立てを始めました、妻君はおかしな事をなさると、七兵衛に仕細をききますと。

『これ見い、こんなに勘定があるといふが、此勘定はなかく拂へぬ、家財を賣

らねばかゝる勘定は拂ひ切れない』

其混雑の折五太藏が歸つて来て、貸座敷の勘定書が過まつて父の手に渡り其爲の道具賣立てと聞いて、吃驚敗亡して、親類中を馳け歩き。

『もう道樂はやめますから助けて下さい』

親類中に泣きまはつて金を出して貰ひ、貸座敷の拂ひをすまし。

『あの勘定書は他所様へ参るのを、使の者が間違へて當家へ持つて参りました、

どうぞ御免下さいませ』

と貸座敷の方からも泣きを入れさし、やつと七兵衛をなだめたが、これからふ

つゝり五太藏の遊蕩もやみましたといふ話があります。

剛膽無類の快男子

天保年間奥州仙臺の金忠輔といふ一箇の豪傑がありました、此人少年の頃から普通の人間と一風變つた所がありました、ある時友達の南部八彌に向ひ、



『之れから南部迄遊びに出かけんか』  
仙臺と南部迄は随分距離があります。

『行つて見たいけれど路用がないから止さうよ』

『路用の事なら心配無用、懷中に用意してある』

『それなら行かう、併し自宅へ歸つて旅の用意を致して來やう』

『馬鹿いつちやいけない、男子至る所皆我家ぢや、南部位の所へ行くに態々旅の用意もあるまい、此儘行かう』

『よし行かう』

と丁度其時は兩人共擊劍の先生の所へ通う途中でありました、破れ袴に高下駄の儘漂然として南部へ行きました、而して宿を取つたが、八彌は。

『宿賃はあるんだね』

『ないよ』

『路用は懷中に用意してあるといつたぢやないか』

『云つた、懷中といふのは此胸の内ぢや、まあよくしないてついてお出で』

頓て金忠輔はどう説きつけたか旅宿の主人を説きつけて、古机と毛氈のきたないのを借りて大道へ出かけた。

『何をやるのだい』

『辻易者ぢや、君も傍に玉へ』

『何故又辻易者をやるのだ』

『かうして錢を造るのぢや』

『果して錢が這入るか』

『まあ見給へ』

案ずるより産が易い、到頭一人の田舎漢が引つ羅つた、忠輔性得の才智と辨口とを以つて。



『はあ成程お前さんは失せものぢやな』  
『へゑ失せ物でござえます、大きな失せ物で人間が一匹何所かへ行きましてのう』

と忠輔の辯説にまかれて了ふていゝ加減な易者とも知らて、易を見て貰つていくらか鳥目を拂つて行きました。

『それ見給へ、からすれば宿賃が仕拂へるでないか』

『成程之れは妙ぢや』

忠輔は出鱈任せの卜筮で若干の金を得て、之れを旅宿へ仕拂ひ南部を出發しました、出かけた時刻がおそかつたから途中で日が没れて了ひまして宿舎もない田舎で夜になりました。

『金君今夜は何する』

八彌は心配して聞きますと、忠輔平氣なもので、

『まあ心配し給ふな、僕がついておれば大丈夫だ』  
と其村の名主をつとめる大百姓の家へ行き、行き暮れたものぢやが宿をかしてくれと頼みました、最初は體よく斷はられたが、そんな事で驚く忠輔でありませんから、おいそれと出ていかない、のみならず、例の旨い口先で首尾よく名主を説きつけて到頭宿をかる事にしました。

『まあ之れで安心といふものゝ、明日は晝飯を何しやう、一體此家の主人は因業ぢや何とかしてとつちめて了ひたい』

と考へてみました、けれど之れといふ妙策も浮ばず、思案は寝てからと横になると晝間の疲れてぐつすり寝て了ひました、不圖眼がさめると夜半でありました厠へ行き用を達してゐると厠の傍に馬小屋があると見える。

『ふむ這奴は面白いわい』

と丁度唐辛の粉が少し許りありましたから、こつそり馬小屋へ行き馬の兩眼口



鼻へ其唐辛の粉を塗りつけて、之れでよしよしと寝間へ這入り素知らぬ顔をして  
ぬました、すると馬めは唐辛を塗られたのだから痛くて耐らぬ、ヒン／＼嘶く  
板を蹴る、大した騒ぎになつたから家中は眼をさまし、さあ大變だ馬が急病にな  
つたと俄に上を下への大騒動。

「急いで馬醫者呼んで来い」

「馬醫者の所へは六里もありませんが」

「けれど仕様がないうまく々々」

「行く迄に死にはしませんか」

「さうだね困つた事ぢや」

此騒ぎを聞いて忠輔は心の中で笑ひながら態と手を叩いて人を呼び、

「先程から騒がしいが何とした」

「へゑ、俄に馬が病ひまして」

「ほうそれは氣の毒だ、某多少馬の病氣については心得てゐる、見て進ぜうか」

「へゑ／＼、夫れは結構な話で、實は馬醫者を迎ひに行きまじやうと存じまする

が、夜中の事なり大分路程がございますので」

「よろしい某が治して進ぜう」

と忠輔は素知らぬ振りをして以前に行つた馬小屋へ行き、何だが正體の知れぬ

毒にも薬にもならぬ粉の様なものを出して鹽の水に打あけ、其水で馬の目や鼻を

洗つてやつた、も／＼唐辛の粉さへ落せばいゝのであるから、洗ひ落して貰つ

て馬はすつかり納まつて了ひました、之れを見て主は喜び。

「お蔭様で助かりました」

と大喜びで謝禮の金子を出す、忠輔は態と。

「いや宿かりた上に斯様の物は」

と斷りますが、田舎人の律義にも差上げたいといふを溢々受けて。



『何だ八彌、明日はウンと御馳走しやうぜ』

忠輔の才智はこんなものでありました、又ある時の話であります、忠輔が旅をしてゐた時風呂に入りまして濡れ手拭を下げて廊下を通りました、物のはずみに手を振つたが、手のしづくが傍を通つた武士の顔にかゝつた、此武士虫の居所が悪かつたと見えて、

『お手前お待ちなさい』

『何用でござる』

『拙者の面體へしづくをかけながら一言の謝辭もなく行き過ぎやうとはちと禮儀でござるまい』

『はてさて、存ぜぬ事とて』

一體忠輔は眞面目な折でも何だか人を馬鹿にしたやうな所があります、平常人を人臭しとも思はぬからであります、此折も言葉は角はないが、物の言ひ振りが

變に高振つて聞えたから件の武士は益業を沸し。

『何有、其言葉、今一應いつて見い』

『はてさて、存ぜぬ事とて』

『黙れ、武士に向つて其冷笑ひとは、刀の手前容赦は致されぬ、御相手なさい』

『何の相手』

『決闘』

『決闘、結構』

『しかと承知か』

『は、一段と面白い』

一旦の怒りに武士は到頭決闘を申込んで了うた、忠輔は剛膽者でありますから一向氣にもかけず、其夜はしたゝかに酒を飲んで明日の決闘も忘れたかの様にぐうぐう高野をかい寝てしまひました、此方の武士は一時の怒りに任かして果し



合ひといひ切つたもの、根が臆病者であつたと見え、其夜は忠輔の様に吞氣に熟眠する事が出来なかつた、床に入りても明日の勝負の掛引に頭腦を惱まし、先方からから打込んだらから受け流してなどと終夜考へてゐる内に、曉つげる鶏の聲が聞えました、おくれれば恥なりと彼武士はまだ暗い内から扮装甲斐々々しう出立つて、約束の場所へ来て今かくと忠輔の来るをおそしと待ち設けてゐました。然るに剛膽な忠輔は相手と變つて吞氣な姿にぐうぐう寝てゐます、日が出ても寝てゐます、ぢり／＼致しゐるは彼の武士で、扱は彼奴おち氣ついて俄に逃げ出したかと、宿所へ歸つて見るとこれは如何に忠輔は夢の最中、起すも残念だと自分も待つてゐるとなかく起きて來ない、はて變な奴だ、して見ると彼奴一旦の行きが／＼りにあゝいつたもの、後になつて臆病風が吹き出て、態と寝た振をしてごまかさうとするのか、併し考へて見れば相手に戦ふ心もないものに早朝から力んでゐたのも馬鹿々々しければ、僅か水の飛沫に生命の取りやりも馬鹿々々し

いな、考へれば考へる程つまらぬ決闘ぢやなと、怒り心落つくに従つて前夜一睡もせぬ疲れが萌して我れにもあらでとろ／＼と寝て了ひました。忠輔はぐつすり寝込んで後漸く眼が覺めました、手をたゝいて時刻を聞くと晝過ぎだといふ、して見れば約束の時刻は過ぎた、併しまだ約束は果してないからあの武士は何したと見にやると、疲れ切つた後とてぐう／＼寝入つてゐます。『よろしい、奴一泡ふかしてくれやう』と忠輔は後鉢巻に白襷を十文字に綾どり十分に身仕度をして、件の武士の熟眠してゐる枕頭に立ちて、力足どう／＼と踏み鳴らし。『起きめされ、豫ての約束ぢや』と破鐘の如き大音聲で、寝れる耳にどなり立てたら、件の武士は吃驚眼を覺まし、寝ねた眼をこするを、『さあ時刻は過ぎた、片時も早く勝負ぢや勝負ぢや』



とがなり立てるに、まだ十分眠氣の去らぬ武士は、神心朦朧として前後を忘却し、物いふ術も知らぬ、忠輔益短兵急に催促しましたが、件の武士は全く我逸まりを悟つて心から和睦を乞ひました、忠輔とて無益の果し合ひなど致す氣もない、然らば和睦しやうと共に酒を酌み交はしたといふ逸事もあります。

又ある時に矢張り旅の折でありましたが徒然の餘りに同じ宿の旅人が集つて碁を打つてみました、忠輔も其中に交り他人の碁打つを見てゐたが、其内に一人うまい男がある、うまい丈けならよろしいが此男仲々天狗で獨りで威張つてゐますけれど碁は實際強いのでから誰しもかなひません、益鼻を高らして威張り散してゐるのを見るに見兼ねて忠輔は傍から態と聲かけ、

『拙手な打方ぢや』

と冷評しました、外の批評なら兎に角、拙手だといはれて碁天狗丈けに承知が出来ない、

『然らば一石參らう』

と氣色ばんで忠輔に向ひました、忠輔尙更からくくと笑ふて鼻であしらひました。

『打つはよいが我輩の碁は普通の碁ぢやない、唯打つのは御免だ』

其實忠輔の碁は駄下手であるのであります。

『ほう唯打つのは厭だとあらば何が望みぢや』

『賭けやう』

『ふむ賭ける、何を』

『ちと大きい、千兩賭けやう、我輩は小ぼい賭の碁は打つた事がない』

吹きも吹いたり千兩の賭碁には相手の天狗もたぢくとした。

『千兩は多過ぎる、千兩の百兩のといはず小さい所で』

『小さい事は厭ぢや、千兩出さつせ』



『千兩の百兩の持合せはない、持合せでやろう』  
『僅か許りの小銭なら御免だ、よろしい持合せでやらうとあらば、小さい銭は目  
當てない、お互の生首かけやう』

『へえ生首』

『左様ぢや、武士の碁も剣術も一つぢや、必死の勝負をするは一つぢや、さあ來  
い』

と白石を引つ擱んで碁盤に向ひました、其勢ひのすさまじさ、相手の碁天狗は  
悉く氣を吞まれて了ひました。

『さあ何した』

『へえ』

『へえでは別らぬ、首くれるか、但しは詫びるか』

『詫びます』

『はゝゝゝ弱い方ぢや』

と碁石を捨て忠輔は高笑ひしました、斯様いふ大膽な男だからする事がいつも  
奇抜でありました、萬事度胸一つで行かうといふのであります、擊劍をやつても  
型やそんなものでやらない強い氣性一つでやる、ある時藩主の前で晴の大試合が  
ありました、家中の侍は此日を晴と心得て日頃練磨の術を示さんと當日の勝負  
の劇しさは一通りでありませぬ、従つて試合ある一月も前から毎日々々稽古をは  
げんで夜の目も寝ずに稽古してゐましたが、忠輔は一向無頓着で稽古など少しも  
しません、却つて毎日鹽釜へ遊びに出かけて酒を呑んで面白おかしく遊び暮して  
ゐました、愈當日になつても矢張り朝から酒を飲んでゐました、友達が連れ戻  
つた時もまだ酒臭い。

『貴公の相手は大分手剛いものぢやぞ』

『ふむ、手剛いとて知れたものぢや、ゲープ』



『まだ酔つてゐるな、夫れでは駄目ぢや』  
 『は、忠輔が酔つてゐるから駄目ぢやとな、まあ見い』  
 忠輔の相手は藩中に於ても聞えたる使ひ手でありました、然るに忠輔少しも恐  
 れず仕度をして晴れの場へ登りました、併し忠輔考へるに此相手は並のものでな  
 い、腕にかけては負けるに違ひないから一番際どい所で勝つて見せやう、と腹の  
 中で思案をきめました、とは知らぬ相手は『金忠輔今に一ひしぎぢや』と嵩にの  
 つてざり／＼つめよる、忠輔どうもかなはぬざり／＼引き退がる、今に一打と見  
 る時、豫て計つた忠輔はばつと身を翻して藩主のゐる前迄で引き退がつた、今  
 一打と打落しかけた相手は、おろせばものゝ間違藩主に傍杖といふ事があつては  
 と餘りの事に驚いて愕然としました、其隙めがけて忠輔は  
 『お胴』  
 と一本手際よく打ち込みました、之れで勝負は歴然忠輔の勝利となりました。

剛膽無類の忠輔は遂に仙臺で一生を終るやうな吝な人間でありませぬ、同志を  
 募つて蝦夷へ渡り、土人を撫付けて尙も奥深く入りて土人数百人を率ゐ、勘察加  
 へ渡り程なく露西亞領迄這入りましたが、國許にゐる叔父との行違ひから蝦夷を  
 去つて今度は安南に行き、其土地の王位に等しき地位迄登つたさうにいひ傳へら  
 れます、何しろ快男子金忠輔は冒險的日本人の代表者の資格を備へてゐた男であ  
 つたさうです。

單身露西亞に行く

『同じ船乗りでも大小はある、一生涯小ぼけな船の船夫で終るのは男子に生れた  
 價がないといふものだ、やるなら大きくやらなければ嘘だ』  
 淡路國といへば瀬戸内海の東手に當る島國であります、其國の都志村といふ小  
 さい村に小商人の彌吉といふ男がりました物領息子は嘉兵衛といふは幼少の時  
 から負けず嫌ひの飢鬼大將でありました、大きくなつてから家の厄介になるもよ



からずとある船頭の所へ奉公して船漕ぐ術を習ひました、けれど一體に大志を抱く嘉兵衛は一生涯淡路の様な小さい國で日を送るつもりもなければ又小船夫で暮すつもりでもありませんから、父が亡くなると共に五人の弟を連れて海を越へて攝津兵庫の港へ行き、此所で六人の兄弟が氣を揃へ手を揃へて稼いだ甲斐があつて若干の金が出来ました。

『さあ之れからが本當の勝負だ』

と貯へた金で大船を造り種々の商品を積み乗せて乗るか反るかの一六勝負と、海を渡つて遠く蝦夷松前へと出かけました、若し其で失敗すれば此人の一代もゑらい事にはならなかつたゞらうが、根が才智がある上に度胸のいゝ男であるから目算通りの金儲けですつかり金を儲けて歸りました、之れから高田屋嘉兵衛と名乗り船乗仲間でも稍人に知られる人間となりました。其頃幕府に於て大分北海の方へも氣をつけ出し役人を蝦夷地へ派遣さして殊に

極地後志擇捉の諸島を巡視しやうといふ事になり船乗りを求めてみました。

『時に弟共や、お前達は如何に思ふか知らぬが』

と嘉兵衛は此事を聞くや五人の弟を集めて相談をしました。

『自分の家もお蔭で相應なものになった、これはお前達や私の骨折りには違ひないが、併し一は役人達が色々便宜を與へて下さつたからいはいはゞ國恩といふものも幾分與かつてゐる、然るに今度役人衆では擇捉行き船乗をほしがつてゐらつしや、此所で一番我等兄弟が國恩の一分を報ずるために出かけて見やうぢやないか男子に生れたからにはする丈けの事をせんでは面白くない、殊に捉縛島といへば今迄行つた人もない様な島ぢやが、何んなもので又大きな旨いものが落ちてゐないにも限らんから、何ぢや弟達に異存はあるまいかね』  
と相談をしたが弟は皆兄嘉兵衛のいふ事なら何でも従ふといふ、然らば一番やつけるべしと此由届け出で日を見計らひ蝦夷の極地へ向け船出をしました。



海上障りなく無事擇捉へ着きました。が何様の極地の事とて見渡す限り原野で、土人の数は少なく海岸には手づかみの出来る程魚が寄つてゐます。

『成程人の来ぬ所丈けあつて面白い所ぢや』

と嘉兵衛は土人を集め築を設けて魚取る法を教へ、夫れから次第に手馴付けて遂には土人が全く心服する迄に立ち至りました。此上は役人の見分を希ねがうと其由幕府へ届け出ましたから、日移さず江戸から役人が見えて、嘉兵衛の案内に依りて見て廻ると、嘉兵衛の功績空しからず土人共は全く日本の事を慕つてゐます。

『嘉兵衛の功勞過分ぢやぞ、何れ追つて恩賞の沙汰する』

と役人は喜んで江戸へ歸り、嘉兵衛は功に依つて爾後祿を賜はる身分となり夷蝦地の官船の長となりました。夫れより嘉兵衛は始終同島へ出掛け物産を積んで内地で捌きましたから家は愈富み、松前函館に立派な支店を置く様にもなりま

した。

茲に一つ露西亞と日本の間に間違ひが起つた、といふは露西亞の船屢樺太へ参り何時も亂暴狼籍を働きますから何日かは復報を致さうと待ち構へてゐるとは知らずに文化八年ゴロジンといふ露西亞の士官とリゴルドといふ士官が軍艦を率ゐて蝦夷諸島を測量して廻つて國後に錨をおろして碇泊しました。

『あの露西亞人をたばかり捕へよ』

と日本の役人は隙を見てゴロジンと外七名の水夫を引つ捕へ松前の牢へとぶち込みました。之れを知りたるゴルドンは危き所を脱れ早々錨をあげて逃げ出しましたが、之れぞ次第々に復雜なる關係を生ずる因になりました。

リゴルドは這々の體で逃げ歸りましたが何とかしてゴロジンを取り戻したい、いゝ方法があるまいかと思案すると丁度ありました。其以前に南部の五郎次といふ者が漂流して露西亞人の爲めに捕へられました。此者久しき間に露西亞の言葉



も覺え自分は蝦夷の長官中川其左衛門といふ役人だと威張つたものですから、露西亞人は本當にしてさる立派な役人ならば其積りに取扱はねばならぬと俄に大事に取扱ふ様になりました。

リゴルドは此五郎次の事を思ひ出しまして、斯る高官なら此者を日本へ返せば代りにゴロジンを返してくれるだらうと船二艘を派して、五郎次外六人の漂流民を連れて國後に参り前回の始末から何卒ゴロジンを返して貰いたいと頼んだ、然し日本の役人は承知せぬ、のみか、

『あのゴロジンなら死刑に處して了ふたから後の祭りだ』

といひ切つて了ひました、死んだ者なら仕様がな、リゴルドは且つ怒り且つ悲しみ、詮方なく船を出したが何とかして、此恨み報ふてやりたい、夫れよりもゴロジンが本當に死んでゐるか何だか尤も知りたいと、海上を乗り廻はして日本船を見付け次第引つ捕へてくれやうと待ち構へてゐるとは知らずにやつて來た

船が一艘ありました。

此船外ならぬ高田屋嘉兵衛の船で樺提から物産を積込んで今しも函館へ入港せんと沖合を進む内、空うつ浪よりも耳を驚かす砲聲一發、何事の出來と驚く耳元へ又一發、四方を見れば霧かゝつて夜は明け放たねば何物も見判たない。

『戦さぢや』

『いや海賊ぢや』

と船中上を下へと立ち騒ぐ内に、嘉兵衛少しも動ぜず、自ら舳頭に現はれてかゝる霧の中をすかしてよく見るに、まさしく異國の軍艦と覺しきものが此方へさして近付き來ます、思ひがけない事として流石の嘉兵衛も前後の術も知らぬ、況んや他の四十四名の乗組共は、外國軍艦が自分の船を襲ひに來ると知るや身も世もあらばこそ、

『それやこそ大變ぢや』



『南無阿彌陀佛々々々々々々』

『もう生命の納さめ時か、さてもく』

と嘆く泣く悲しむ騒ぐの外はありません、我れ先にと船底へ逃げ隠れ誰一人船の上には現はれて襲ひ来る敵を防ぐといふ勇氣のものはありません、茲に於て嘉兵衛唯獨りうなづき、何はとまれ見ぐるしい様見せては日本男兒の恥だ、船沈むとも生命失ふとも脱れぬ所は詮方ない、其上に恥かいてはならぬと、心を決して態と大帆柱の下に胡座をかき、来る外國船の由を如何にと見張りをしてゐました。露西亞の軍艦では日本船を見付ければ否應なしといふ意氣込みであるから、先づ大砲を放つて停まれと命じ、我船を彼方へ近付けて數名の露西亞人が劍つき鐵砲で嘉兵衛の船に飛び移りました、見ると帆柱の所に一人の日本人が胡座かいてゐる、あいつ引つ捕へよと、むらむらと寄つて来るを、嘉兵衛憤然として、  
『馬鹿ッ』

とどなるやぬつくと飛び立ち、

『理不盡にも亂暴働くは海賊か、何奴ぢや、無禮を致すに於ては容赦はないぞ』

其勢ひのすさまじさ飛込んだ露西亞人も吃驚してたどろとしました、併し多勢に無勢であるからさうく尻込みもしないで、何だかベチャクチャ饒舌るが言葉が通ぜぬからいふ事が少しも判りません、漸く手眞似で兎に角露西亞の軍艦迄一緒に來いとめしらせに嘉兵衛も納得して靜かに着物を着替へ一刀腰に手挟んで露西亞の船に乗り移りました。

それやこそ日本人の大將株が來たといふので露西亞人七八十人許りバラバラと嘉兵衛の傍に集り忽ち嘉兵衛を取圍んで了ひました、勿論劍を手にするもの彈丸をこめた鐵砲を所持せるもの許りで、すはといはゞ嘉兵衛を殺しかねまじき氣勢であります、けれども嘉兵衛少しも周章へずして靜々として長官リゴルドの前に進み出ました、リゴルドは嘉兵衛の落着いた振舞を見て、此日本人唯者ならず



と見て取り、叮嚀に艦長室へ案内して扱差向ひになり通譯を中に置いて色々話を始めました。

「貴方、日本人中川良左衛門といふもの知りますか」

「知りません」

「中川良左衛門は擇捉の日本人の役人あります」

「擇捉にはそんなものは居りません」

「然らば此手紙御覽なさい」

と澤山の手紙を示しました、夫れを見ますと、中川良左衛門とは偽名で實は南部の五郎次といふもので、先達て日本へ送り歸されたものと判りました。

「此者は中川良左衛門ではありません、南部の五郎次といふ並の船夫であります先達て貴國の船で送り歸されました」

「左様私が送つたのだ、其折ゴロジンと取り替へてくれといふたのに、日本の役

人はゴロジンは死んだとて斷りました、ゴロジンは何日死にましたか」

「いやゴロジンは生きてゐます」

「いや役人は殺されたといひます」

「いや確に生きてゐます」

「生きてゐる證據がありますか」

「よろしい、我言葉を信ぜぬなら」

嘉兵衛は腰の刀をぬいてリゴルトの前へ差出しました。

「私はゴロジンが生きてゐるといふけれど貴方は信じない、我いふ言葉が詐りであるといふなら此刀で我首を斬つて了つてくれ、高田屋嘉兵衛は決して嘘や詐りをいはぬ、首かけて證明する」

と眞實こめていひ切つたのに、リゴルトも疑ひ全く晴らし。

「判りました、貴方は確かだ、それについては色々話をしたい事があるから、我

と眞實こめていひ切つたのに、リゴルトも疑ひ全く晴らし。

「判りました、貴方は確かだ、それについては色々話をしたい事があるから、我



船に乗つてカムサツカ迄来てくれませんか」

「私一人丈けでよろしいか」

「従者を連れてでもよろしい、四五人をお連れなさい」

「よろしい承知しました、一緒に参りませう」

夫れから嘉兵衛は我船へ歸り、實は斯々の間違ひから露西亞の船は日本人に疑ひかけてゐる、自分はカムサツカへ行つて話をきめてくる、皆の内から四五人を伴れて行くといひました、すると、

「旦那、お伴は私めを」

「親方、私をお伴に」

と云ひ出る中から吉藏、金藏、文次、平藏の四人を選んで召し連れ、他の物には別れを惜しんで露西亞の船に移りました、其折日本の役人に向け一通の手紙を残しました、夫れは自分は之れから露西亞の船に乗つて彼國へ行く、仔細は日露

の問題で、自分は御國の爲めに盡くす覚悟で行くと認めてありました、茲に嘉兵衛に一人の愛妾がありました、嘉兵衛が四人の船夫と露西亞の船へ乗り移ると聞いて狂氣の如く泣き悲しみました、露西亞人は大に女の身の上に同情してやつて嘉兵衛に連れて行つてやつたら何だといひました。

「かゝる所に婦人など携ふべき限りでありませぬ、女々しいは女の常打捨て置き下されたい」

と素氣なく斷つて、扱自分の乗つてゐた船と別れて、露西亞船の進む儘に任して置けば、船は幾日かの航海の後目ざすカムサツカに着きました。

カムサツカに於て關係者を招き段々調べて見ると、日露双方の手違ひといふ事が判りました、それは先年露西亞の使節レサノツトといふのが長崎へ来て通商交易を相談に來たのに對して日本が取扱法を知らずして無狀な待遇をした、レサノツトは怒つてホーシーウに命令を下して蝦夷地方を荒さした、之れで日本人は



露西亞人を憎んだ、其後レサノットは自分の出した命令を悔ひてホーシューに直ぐ歸るやうにいふたけれど、ホーシューは承知せず却つて愈々亂暴を働きました是に於て露西亞の役人大に困つて兩國の禍ひを大きくしてはならぬと其事情を取調る中に、ホーシューは自分の仕過ぎた事に氣がついて自殺し、レサノットも病死した、夫れが誤解に誤解となり此始末と判つて、嘉兵衛は、

「然らば萬事某が引受けますから、兩國の親和を計りましやう」

といふリゴルドは喜んで兎に角露西亞の首都へ行き皇帝に拜謁して許しを得て参ると、西比利亞を出發して露西亞本國へ歸りました、丁度其時分ナポレオンの戦争で露西亞は上を下へと大騒動であります、夫れでリゴルドは急に東へ歸る事が出来ぬ、リゴルドの歸るを待つ内に文治と吉藏は病を得て死にました、其内リゴルドも歸つて來ましたから、嘉兵衛は同道して國後へ着き、役所へ出頭して日露兩國間の誤解を悉く説き、双方の意志を相通じて夫々返へすものは返へし、

受取るものは受取り、殊にリゴルドの欲しがつてゐたゴロジン外七人を渡して無事に話をつけました、此功勞により嘉兵衛は褒美を貰ひましたが、褒美は知れたものでも死生の間を潜つて爲しとげた此一事は高田屋嘉兵衛をして益天下の人物と價をあげさしました。

戀の返報に糞垂れる

幕末の頃梅田雲濱といふ豪傑がゐました、出生は若州小濱の人でありましたまだ年少の頃非常に美しい男振りであつたから、想を焦す若い娘が澤山にありました、けれど後來になつて天下の豪傑といはれた程の雲濱でありますから、年の若い頃からしつかりしてゐる所があります、若い女がややほやいふ噂さを耳にもかけず一心に勉強してゐました、するとある娘が想ひに耐へかねて毎日雲濱が師匠の許へ通う途中、時刻が定つてあるから門邊へ立つて見守るは最初の内、次第にかうじて雲濱が行手に遮がつて、態と衝き當らん許りにしました、之れを見た





る雲濱は直に娘が自分に氣がある事を察すると共に。  
 『婦女子に斯様な無禮な眞似をされるは我威の足らぬ所ぢや、よし／＼明日はせ  
 ん術こそあれ』

と其翌朝も例の如く娘の家の前を通らうとすると、果して門に立つて見てゐま  
 す、こゝぞと許り雲濱尻をくるりと捲つた、而してきたない禪をぬぎ捨て、  
 思ひきり糞を大道にひり出した、其態を見るや流石の娘も興ざめて顔を眞赤にし  
 て逃げこむ、再び雲濱に慕はぬやうになりました。

『それ見ろ、淫奔娘が負けおつた』

と雲濱から／＼と笑つてゐました、大概の者なら若い女に戀ひ慕はれたら嬉し  
 がるを、雲濱却つて學業の阻げ且つは我威光にかゝはると振り飛ばした所が豪い  
 又其振り飛ばし方が奇抜である。

夫れから雲濱はいつまで若狭の様な田舎にゐても出世が出来ぬと思つたから、



近江の天津へ出て儒者上原甚太郎の門に學びました、上原は山崎闇齋學派の儒者で非常に嚴格な人であつたが、雲濱の人物を見ぬいて此男は後來に豪傑となるべき男ぢやと見込みましたから、娘の婿にしました。

「天津にゐるより京都へ行つてやつて来い」

と雲濱を京都へやりました、流石京都は王城として小濱や天津とは事ちがふ、雲濱は寺町大雲院の寺中を借りて棲み、後二條堀川の望楠軒に移つて弟子を集めて教授してゐました、けれど一體闇齋派の學者といふは嚴格なもので、雲濱も其流れを汲むから、生徒に教へるのも厳しいものでありました、生徒が間違つた事をいふと鞭うたぬ許りに叱りつけ、或る時は餘り叱り様がひどかつたから一生徒は氣絶したといふ位でありますから、一人減り二人減り、雲濱の所へ物學びに来る者がなくなりました、されば日々の米鹽に事缺く、門前雀糞を張つて貧乏は身にしみくとしみ渡ります、其頃若狭の殿様から使者があつて、京都の屋敷にゐる

若侍へ物を教へてやつて貰ひたいと頼みがありました、貧乏の時なり且つは殿様よりの仰せなら、普通の者であつたら喜んでお受けをするのを、一風違つた雲濱はおいそれとお受けせぬのみか、其頃若狭藩では俗論黨乃ち幕府黨が多くあつて朝廷黨が少い、朝廷を尊び重んずる勤王黨なる雲濱は夫れが氣に入らぬ、俗論黨などは人間ぢやないと思つてゐましたから。

「折角だが、鳶や烏に物教へても何の益もないからお断りする」

ときつぱり断つた。烏や鳶とはひどい、併し雲濱は固い勤王黨であるから其眼から見れば幕府黨の若狭藩杯はさう見えなでしやう、此言を聞くや若州侯大に怒り。

「源次郎は以後一切出入差止めぢや」

けれど雲濱びくともしませぬ、貧は恐るゝに足らぬ心の卑しいのが恐るべきものであると頑張つてゐましたが、生活は日に日に苦しくなる許り、今は都にも住



みかねて洛北の一乗寺村の觀音堂へと移りました、此觀音堂は誰も棲み手のない廢屋であつたが、雲濱夫婦は陸まじい家庭を此廢屋に結んでゐました。

或日身装立派な侍が尋ねて來ました。「拙者は肥後藩の家老長岡監物が家來愛敬と申す者で御座います、主人申されますには淺網見齋先生の所持致された刀の鐔には赤心報國の四字が彫つてある、是非夫れを手に入れたい、所が當時淺見先生の學問を繼いでゐる方が餘り御座りません、承はりますれば梅田先生はあの畑の方ぢやさうに、若し赤心報國の鐔の在所を御存じなら教へて頂きたいと存じて推參致しました」

「それはよくおいでゞした、成程其鐔はたしかにあり申す」  
「之れは頂上な話、何所に御座りまするか」  
「此梅田が持つてゐる、此胸にありますぢや」と雲濱先生は我胸を指した。

それは雲濱は元來仕官する事を好まぬけれど、外ならぬ先師細齋先生を慕つてゐると聞いて、さういふ志の人物なら自分も仕へたい、赤心報國の鐔は持ち合さねど、赤心報國の實物を此胸に秘めてゐる、鐔は死物ぢや、我胸には眞の赤心報國があるといふ意味で申したなれど、愛敬といふ侍には此深い意味が判らぬ矢張り鐔の方に氣を取られて、天下の豪傑が身につかふといふを買はずに歸つて了ひました、千里を走る駿馬があつても見てくれる人がなければ世に出られぬものであります。

斯様にしてゐる内に益々貧困は迫り、焚く薪さへなくなつた。或日妻君が觀音像の前によゝと泣き伏してゐるを見て雲濱大に怪しんだ、一體此妻君は雲濱の妻に恥かしからぬ人で、今日迄貧しき中に少しも厭な顔も見せず來ました、之れには雲濱も大に有難がつてゐた、然るに今日は何故か泣き伏してゐますから。「これよ如何した」



と肩へ手をやつて慰めると、妻君は一首の和歌を見せました。  
冬枯の軒の妻木もたきはてし

庭に落葉の積るまもなく

貧乏で薪がなくなつた許りでない、落葉枯枝を拾ふて薪の代りにしてゐたが、  
其落葉さへつき果てたといふあはれな意味であります、之れを聞いて流石の雲濱  
も、

「不憫の女よ」

と涙が浮びます、其所で雲濱も一首をよんだ。

事足らぬ住居なれども棲まれけり

我を慰む君あればこそ

夫婦の中は斯の如く睦じいものであつたが、妻女は遂に貧居の中に死にました  
雲濱は何所迄不幸な人でありましたやう。けれど彼は一念國事を思ふ事急にして他

を顧みてゐる暇がない、ある時三條大橋を高足駄に尻ひつからげ大刀を帯んで東  
へすたく行くを知れる人が出逢つて、

「梅田君、何所へ行きます」

「外國船が來たと申すから、之れから相州浦賀へ出かけやうと存じて」  
萬事が斯様な慷慨家でありました。

地震で死んだ英雄

藤田東湖は幕末に於て水戸の豪傑といはれた許りでなく、天下の英雄と崇めら  
れた人物でありました、身材は高く色黒く眼はギロリと光り見るから、豪傑らし  
く而して物事にこせくせず、往々風變りの行ひがありました、少年の頃から變  
つた所があつてすることが普通の少年とは違つてゐました。

「藤田の小兒はゑらいものになるだらう」

といはれてゐました、東湖の父幽谷は至つて酒好きで三度々々酒に浸つてゐる



やうな風でありました、弟子や書生共に講釋する時でも机の横に徳利を一本置いて、お茶の代りに酒を飲み、講釋が面白くなつて來ると我れを忘れて大聲になつて講釋をします、誠に元氣のいゝものでありました、東湖がまだ小兒の頃に何日も父の傍に此講釋振りを見てゐましたが。

『父上の傍にあるあのお酒を呑んで見やうか』

といひますと、何れも血氣の書生共であるから惡戯は好物であります。

『やつて御覽なさいよ』

其所で東湖は父の講釋を平氣な貌して聽いてゐると、幽谷先生は段々に講義に興が乗つて來て一生懸命にやつてゐる、其隙に東湖はこつそり父の後へ忍んで來て手を延して徳利を引きよせがぶりがぶり呑みました、茶目公の惡戯であります、東湖は小兒の頃から斯まで目がきいてゐました。斯様な才氣も使ひ道に依つては大變悪いものになりますから、父幽谷は早く

から眼をつけ成る丈けよろしき方へ向けさしませしやう、何かの折があれば意見して見やうと待ち構へてゐました、或日の事幽谷は東湖を招いてこれ／＼の用事があるからこれから使に行つて來い、と、握飯の用意をさしてやりました、其使ひに行く先はほんの少しか距りのない近い所でありました、此使ひにやつた事について父に深き考へがあるとは知らぬ東湖命ぜられた儘先方へ行き、用事をすまして腹がへりましたから握飯を食べてから歸りました。

父幽谷は東湖から返事を聞かない先に先づ尋ねました。

『握飯を何した』

『ハイ食べました』

『何故食べたか』

『お腹がすきましたから食べました』

『馬鹿者め』



大喝一聲叱り飛ばされて東湖は吃驚しました。

『ハイ』

『ハイぢやない、お前は何といふ馬鹿者だらう、あの握飯は腹がへつたら食べろと渡して置いたのぢやない、途中萬一の事があつた時の用意に渡して置いたのだ使ひに行つた先は何れほどの距りがある、極近くぢやないか、何も我慢が出来ない程の遠方ぢやない、夫れに腹がすいたから食べた、武士は腹がすく位何でもない、腹のへつた事は苦痛ぢやない、一朝戦さでもあつて腹がへつたから飯を食べねば戦さが出来ないうらなことでは何役に立つ、貴様も御國に事があれば一廉役に立つ者に仕立て上げやうと思つてゐたが、今いふ如き不用意千萬なことではとてもお役に立ちさうにない、よく／＼心をしつかりして人間は萬一の折の用意をふだんからちゃんと致し置かねばならぬ、うかく／＼其場の事で暮す様では行末が案じられる』

と痛い意見をされて、成程父上の言葉に微塵相違がない。  
『到らぬ私 が不調法、以後氣をつけまする故、今度の事は御勘辨を』  
と東湖心から詫びをして、夫れから後は見ちがへる程しつかりした人物になりました。

一體幽谷といふは商人の子でありましたが學問が好きで勉強した効により、水戸の史館の總裁迄に登つた人でありますから我子東湖に對しても、

『勉強せい、並大抵な勉強では駄目だ』

と勵ましました、それで東湖は七八歳の頃から十五歳迄は一生涯懸命に讀書勉強しました、十五歳の折考へるには。

『一體此頃の世の中を見るに、太平無事が永く續いてゐるので士の氣分が引立つてゐませぬ、それに外國の船が日本へ來つて隙あらば白眼でゐます、かゝる時節に文字を讀み書く許りでは男子に生れた用事がつとまらぬ、此上は武藝に心



を用ひ、或は馬に乗り弓をひき槍をひねり劍術をも勉強せねばならぬ』  
と之れから武藝の方へ心を入れ、心膽を練るためには近所の田舎の荒れ寺へ行  
き一夜の露宿して明して氣を練るなど甚だ武張つた方へ傾きました。  
此様な勉強のため廿歳頃には文武の達人となりました。幽谷の子息は親に優る  
とも劣らぬとの評をうけました、父に死別れて廿二歳の折二百石を賜り彰考館  
の編輯に用ひられました。

然るに水戸家に於て騒動が生じた、夫れは當主齊修卿が病氣が重くなつた  
が繼嗣がありません、弟君の敬三郎といふ人を相續人にしやうといふ説と、清  
水家から養子を取らうといふ説とが生じた、東湖は敬三郎方であります、然  
るに敬三郎を煙がつてゐる役人共は清水家から養子を取らうといひ出して、双方  
負けず劣らず争ひを始め此時水戸一家は二派に別れて大變な騒ぎになりました、  
東湖は敬三郎君の爲めに奔走し、遂に此君を立てる事になりましたが敬三郎とい

ふ方は即ち有名な烈公齊昭卿であります。

烈公が水戸の殿様になられてより東湖との君臣の間は水魚の如く、烈公が天下  
の名君と諡はれ、ば東湖は天下の豪傑といはれまして、水戸の君臣共に天下のほ  
まれ者になりました。

其時天下の形勢は益々險惡で外國船は續々やつて來ます、烈公はかういふ時は  
何時戦争が始まるか知れぬから用意をしなければならぬ、といふて戦の稽古は出  
來ぬから追鳥狩と稱して水戸城内千束原へ家中の面々を武裝して集め訓練をし  
ました、何分俄の催しでありますから夫れ鎧の手入れぢや馬の用意ぢやと上下共に  
騒ぎましたが、當日は烈公自ら指揮になる、烈公は行列の整のふを待ち兼ねて。

『それ行け』

と單騎馬を走らしますと、皆の者共は用意がととのひてゐないからまごまごし  
てゐます、流石東湖は平常から油断のない人でありますから、烈公の馬の側を少



しも外れず千東原へ着きました、烈公は自分に續く者は東湖一人であると見て。  
『流石藤田は頼母しい士ぢや』

懷中にせる菓子を下された、斯様に烈公東湖君臣は水魚も管ならぬ程でありました、天下國事に盡くしたことは莫大にあります。

扱安政二年十月二日の關東大地震は今の世迄も安政の大地震として有名なものであります、江戸に於て死者二十萬人出たといふ程の大地震であります、東湖は當夜江戸小石川の屋敷に居りました、客を送つて出て元の座敷へ歸りまた脇差もぬがぬ間に大地震がありました、東湖は早速老母を扶け出して一旦庭へ出ましたが、老母は、

『火鉢に土瓶の湯をかけずに来たが、此地震では火の用心が悪いから始末して來ます』

と引き返へしますから東湖もついで行くと二度の大搖れに鴨居が落ちて來て、

あはや老母は撲れて死ぬと見るや、東湖は飛び上つて老母を自分の身體の下に圍ひ、座して兩手をつき落ち來る鴨居を肩で受けました、突差の間に老母を庭へと投げ出しましたがまた一震れゆれて家が瓦落々と崩れかゝり豪傑東湖も家の下になつて壓死しました、之れ程の豪傑でも母に盡すの孝心厚きは人々のよく心して鑑とせねばならぬ所であります。

豪傑の朝飯前

元治元年六月五日、京都三條小橋西入池田屋といふ旅館で、勤王黨と佐幕黨の衝突があつた、之れは池田屋騒動とて今尙云ひ傳へる騒ぎであります、事の起りは勤王黨の連中が志を合せて、近頃朝廷が佐幕に傾きかけたを悲憤して、先づ守護職會津を斬り其他幕府に加擔する連中をやつゝけて、再び勤王黨の氣焔を揚げんといふので、今年の祇園祭を待つてゐる、此相談を其頃長州藩の定宿となつてゐた前記の池田屋でやつてゐました此事誰知るものあるまいと思ひきや、幕府



方の耳に這入つた、それやつとけると、會津、彦根、松山、濱松、桑名五藩の者に當時鬼と怖れられた新選組の者も混じり何百名といふ者、池田屋の前後左右をおつ取り圍み一時に斬り込みました、何分不意の事なり多勢に無勢のかなしき、やみ／＼討たれたは五六名、廿三名といふものは奮戦の甲斐なく捕はれました。此所に一箇の豪傑があります、安東鐵馬とて當年廿二歳、同じく池田屋組の人でありましたが、丁度其騒動の折居合はしたが、逸早く亂刃の中を潜りぬけて自分の宿所へ立歸り、性來大膽無類の若者でありますから、其儘蚊帳を吊つてグウ／＼寢込んで了ひました、翌朝になると安東鐵馬の宿所を突きとめて新選組の者が十數人やつて來ました、表戸を敲くけれど鐵馬グウグウ寢込んでゐる、氣早の新選組は面倒なりと許り表戸を蹴破つて躍り込みました、此響きには流石の安東も眼を覺まし。

「何奴だ」

と怒鳴りましたが其折はもう十餘人の新選組に取圍まれておりました。

「其方は池田屋組の殘黨ぢやらう」

「いや違ふ」

「姓名は何と申す」

「安東鐵馬」

「生國は」

「美作國」

「取調べの筋があるから屯所迄同道願ひたい」

「畏まつた」

安東は平氣な貌してゐる。

「併し只今寢込みを覆はれて顔も洗つてゐなければ腹もへつてゐる、用意とゝのへる間暫時待つて貰ひたい」



『よろしい』

安東は悠々として顔を洗ひ、土風爐に柴をもやして湯を沸し、湯漬けながさがさやつて、衣服を改め。

『さあ同道致さう』

餘り落着いてゐるから新選組の者も心をゆるめた、此者は或は池田屋の殘黨ぢやないかも知れぬ、此位に落着いてゐるのは罪のないものぢやらうと考へたからであります、でありますから別段安東に繩もかけず前後を守つて出かけました、途中に於て安東は卒然と、

『小便が催したから少々我慢を』

と前の溝へゆる／＼小便を始めた、前後の工合全く静かなものであるから、隊長は二人の卒を安東の傍につけ、自分は外の者を率ゐて前に立ち七八間行きかけた、安東は前後をよく見計つて小便を十分しすすや、電光石火、一人の卒を水

も耐らず切つて捨てた、之れはと驚く他の一卒を叫ばしもあへず返す刀に切り捨て、血刀引つ提げた儘北を向いて逸目散に逃げ出した。

『やあ逃げた』

新選組の者は周章て追つかける、鐵馬は宙を飛んで長州屋敷へ飛び込んで、首尾よく敵の手から脱れました。

同年七月、長州勢が禁闕を冒せし時、安東は長州勢に加擔して堺御門に奮戦しました、左手に松ヶ枝を振かざして彈丸除となし、右手に大刀振り廻はして勝ち誇る敵の眞中に飛込んで見る／＼數兵を切り倒し、武士として立派な戦死を遂げました。

南海の人中龍

土佐の坂本龍馬は維新の大事業に大きな功績のある人物であります、此人は小兒の頃から流石變つてみました、末は豪傑といはれる人物に限つて少年の頃は



少しぼんやりしたもので、龍馬もまだ十二三歳の頃迄は世間普通の鼻垂れ小僧で背丈も相應のびてゐるに寢小便を垂れて仕方がない。

「龍馬のノツボーやい」

「寢小便たれやい」

と同じ仲間の少年に馬鹿にされて寺小屋の往還りには悪い少年等にいびり泣かされたものであります。

斯様な少年でありましたから父母は學問をやめさせて武術の方を大にやらさしました、つまり學問しても出世は出來ない、此兒は劍術でもウンと仕込んで丈夫にしなければならぬと考へたからであります、此教育法が大に龍馬の幸福となりました、其上龍馬の姉にお留といふのがありました、之れは女だてらに背は高く力強く男まさりの女で、龍馬は此姉にいつも勵まされてゐました、此二つで龍馬はめきくと劍術に達し、段々としつかりした人間となりました。

龍馬は水練の稽古もしてゐました、ある日大雨が降つて河の水は増しました、龍馬は毎日水練の稽古に行つてゐますから、此雨の中も同じく出かけやうと雨を ついてスタ／＼河邊へ行きました、途中で友人に出遭ひましたが。

「龍馬は何所へ行くぞ」

「毎日の水練ぢや」

「此雨に水練とは愚かな話ぢや」

「何が愚かぢや、水の中にはいれば何れ身體は濡れるぢや、雨がこわいか」

構はず河へ這入つて泳ぎの稽古をしてゐました、斯様に龍馬の龍馬たる所がそ

ろ／＼現はれかけて來ましたから、親は手元へ置いとくより之れは一番江戸へや

つて劍道の修業さしたらよからうと、龍馬に江戸行きをすゝめました、龍馬固よ

り望む所十九歳の春土佐を出發して江戸へ參りました、其折父親は龍馬に訓戒の

ために三箇條の心得書を渡しました。



一片時も忠孝を忘れず修業專一の事  
 一諸道具に心を移し銀錢を費さざる事  
 一色情にうつり國家の大事を忘れ心得違ひある間敷き事  
 龍馬は江戸に於ては當時劍道の達人と知られたる千葉周作の門に入りて劍道を修めました、已に國許に於て多少出來てゐる上に、性質自然非凡の所あればメキメキと上達しました。

其頃外國の軍艦が日本近海に來つて天下は騒がしくなつた、土佐の國では勤王黨と佐幕黨がお互に暗闘をやる、坂本は此間に立つて國事に奔走しましたが、當時の海軍奉行勝安房といふのが大に開國論を主張して『日本は何時迄も外國と交はりませぬといふ譯にはいかぬ、國を開いて萬國の仲間入りをせねばならぬ』と説いてゐました、併しかゝる開國論は當時の壯士に喜ばれぬ、壯士の方では外國々々と外國を非常に強い者にいふ開國論者がきらいだ、日本は神國だといふ連中

もあれば、開國もよいが唯へイコラで開國はいけない、一度外國人をウンといはして夫れからの開國だと力んでゐました、龍馬も勿論非開國論者で、

『勝といふ奴は國賊だ、ぶつた切らう』  
 と同志に千葉重太郎といふ劍客と兩人勝を暗殺に出かけました。  
 兩人が此様な目的で來たとは知らぬから勝は何心なく逢ひました、龍馬重太郎の心中には此國賊め唯一打と刀の目釘をしめし、意氣込んでゐました、流石勝丈けあつて様子を見て取つた。

『は、あ御兩所はそれがしを殺しにござつたな』  
 とずばりといひ切りました、かういはれると意氣込んだ兩人も多少氣がゆるみ  
 ました。

『いや、おかくしに及ばぬ、不肖ながら勝は左様に見て取つた、眼中のくばり殺氣立つてゐる所はたしかに暗殺にござつた、いや苦しうない殺される事がある



ばやつて下さい、死生は天に在りだ、併し間違へで殺されるはつたらぬ、且つ殺した方でもつたらぬ、まづ理由を聞きませう』

と泰然自若としてあしらひました、龍馬等は相手がきつぱり出たものですから少し案に相違しましたが、固よりしたゝかものでありますから、

『左様いはれれば何を隠さう、實はお手前を殺しに参つたのです、其理由はお手前の開國論が氣に入らぬ』

『何ら氣に入らぬ』

『日本は神州だ、然るに毛唐人の爲めに侮りをうけるは怪しからん』

『固より日本は神國でござらう、併し開國論者として何も異人に阿諛うものでござらぬ、一體眼孔を大きくして五大洲の様子を見て御覽なさい、五大洲といへば：

.....』

と勝は世界の形勢から兵制沿革を初め詳しく話しました、而して日本許り國を

鎖してゐる譯にいかぬ、開國交易は萬國皆やらねばならぬ事だと告げました。

『斯様な理由で我等は開國論を主張します、國を憂うる情に於ては貴殿方とは劣らぬつもりぢや』

と事をわけて説かれて、刺客に來た兩人は眼がさめて、

『成程世界はそんな大きなもので、各國の形勢はさうしたものですか、それでは日本が獨り威張つてゐても仕方がない』

とつくづく悟り、龍馬の如きは全く勝の學識に惚れ込んで、

『いや判りました、只今迄小生の無智がお恥しい、改めて先生の許に海軍の術の傳授受けたと思ひますが御入門許されませうか』

『お手前が弟子になりたいといふなら何時でもお引受けしやう』

勝も龍馬の尋常の者でないと見取りましたから早速入門を許しました、暗殺に來たものが其人の弟子になるなどは、なるものもなる者、爲る者もする者、兩方



共に變つた所があります。

龍馬の普通人より勝れた事については次の如き話があります。

當時幕府の柔術指南役志田歌之助といふ士が京都に来て居りました、龍馬は其名を聞つけぬますから、一番弟子入りがしたいと思ひまして、志田の所へ参りました。

『一番御指南を願ひたい』

よろしいとやり出したが、龍馬は力に任かせて荒れ狂ふを、志田程よくあしらつてゐましたが、餘り力一杯に荒れるものだから龍馬は床板を踏みぬきました、其途端に締めつけられて氣絶しました、頓て息をふき戻すや。

『もう一番』

と休憩もせず組んでかゝる、此方は名譽の柔術家とて、

『應』

又た組み打が始まりました、今度はグングン押して行つて座敷の隅に疊が積み重ねてある所迄龍馬は押しこまれて、其所で又息の根を止められた。

之れで龍馬も我を折つたゞらうと思ふと、彼れは息をふき返へすや。

『もう一番』

とやつて来る、今度はウンといはしてやらうと思ふと龍馬も亦前の二番の取戻しだと力一杯に荒れます、到頭取つ組んだ儘庭の上に轉げ落ちました、其所でまだ上を下へと荒れ狂してゐましたが、矢張り龍馬は勝てず石と石との間で締めつけられました。

もう之れで凝りたかと思ふと、いや、龍馬は又も取り返えるや。

『先生もう一番』

之れには先生の志田も驚いて了うた。

『今日は之れで稽古は十分でしやう、又明日の事にしましやう』



『さうですか、夫れでは止しませう』

龍馬の元氣の強い事は此位のものでありました。

又ある時龍馬は同志者と一緒に連れ立ちて、洛西嵐山の花見に出かけました、

嵐山は名にし負ふ花の名所で非常な人出でありました、永き春の日も花見る人に

は暮れが早いと氣になるは人の常、龍馬等も十分興を盡くして歸り途につきまし

たが、其頃京都には新選組といふものがありました、物騒な京都の町を警しめて

みました、所が物騒なものを押へる新選組が又物騒千萬なものでありまして、町

を廻る際には抜身の鎗を提げて兩側に列を作つて廻ります、夫れ丈けならいゝが

中には亂暴無類の者が居りまして、荒れものゝ浪人より此方が一層暴れるといふ

風で、

『それ新選組だ』

といへば女や小供は顔色を變へて逃げるといふ位でありました、此新選組の日

指すは諸藩の浪人つまり坂本龍馬の様なのが一番めざされる組でありました。  
龍馬花見の歸り路、此新選組のものに出遭つた、例の抜身の鎗を提げて町の真  
中に列を作つてやつて來ます。

『どうぢや、あの新選組の真中をつゝ切るものはないか』

坂本はかういひ出しました、さなくとも犬と猿の間柄なる新選組の隊の中を突

つ切るといふ事が出来るものですか、伴の友人は之れに返答する所か、若しあの

新選組が自分等にかゝればと堅唾を呑んでゐるといふ鹽梅です。

すると龍馬は道傍に遊んでゐた犬の子を拾ひ取りました、そうして兩手でかゝ

へ込んでさも可愛いといつた風に頬ずりをしながら、進んで來る新選組の隊の真

中へと進みました。

彼方の新選組では何所の浪人かと眼を光らしたが、龍馬は少しも騒がず知らぬ

顔で犬の子をあやなしてぼち／＼歩いてゐます、其無心の風に新選組の者も怪し



きものにならずと見て取り、自然に隊がさつと別れて、龍馬は其真中をしづく  
と通行しました。

人々は龍馬の大膽不敵に驚いたが、龍馬は隊を二つに別けて通ると、後はしら  
ぬ顔に犬の子をおろし、笑ひもせず其儘歩みを續けました。

「何もいゝ度胸だ」

「何がいゝ度胸だ」

友人は驚いてゐるが龍馬一向平氣の平左でありました。

龍馬が西郷隆盛に遭つた話も豪傑同志の事とて有名な話であります。

勝安房が坂本に西郷吉之助といふ男に一度遭つて見よ、随分の人物であるとい  
ひますから、龍馬も西郷の豪傑たる事は聞いてゐますから夫れでは會つて見まし  
やうといふた、勝は坂本のために紹介状を書いてやつたが、坂本は其紹介で遭つ  
て來ました、然るに西郷程の人物にあつたからには大抵の男なら、歸へつた後西

郷はこんな男だとか、あんな男だとか批評するが人間の常でありますから、今に  
坂本がどんな評をするかと勝が待ち構へてゐるに一向返事がない、遂にまちかね  
て。

「何だ面白い男だらう」

「あれは馬鹿です」

龍馬は一言の下に喝破して了ひました、勝は少々驚いて。

「馬鹿とは、どうして馬鹿だ」

「幅の知れない馬鹿です、大きく叩けば大きく鳴るし、小さく叩けば小さくなる  
といふ馬鹿の幅の知れぬ馬鹿です」

奇抜な批評に勝は感じ入つた。

龍馬の妻となつたお龍といふは之れ又女傑でありました、お龍は京都の勤王家  
檜崎將作の娘でありましたが、父の將作は幕府から睨まれて牢獄へほふり込まれ



牢屋で死にました。夫れがためお龍はさる傳手で伏見の旅館寺田屋へ厄介になつてゐました、伏見の寺田屋といふは維新史に大關係のある家で、薩摩藩の定宿でありましたから、龍馬も泊り込みました、龍馬はお龍の容色美しき上にしつかりした所を見込んでゐる、お龍は龍馬の天下の豪傑である事を見込んでゐる、夫れで良縁相つながつて寺田屋の女將の媒介で夫婦になりましたが、夫れよりさきお龍が龍馬の必死の危難を助けるといふ美談があります。

お龍が女ながらもしかりしたものである事は。彼女がまだ寺田屋の厄介にならぬ内、二人の妹がさる悪者にかどわかされて大阪の女郎屋へ賣られかけました、之れを聞いたるお龍は且つ悲しみ且つ怒り、直様衣服を賣つて旅費を作り卅石船で大阪へ下り、目ざす悪者の家をたづねました、相手は人食賣買でありますから花の如き娘が一人やつて來たとて、之れをまた食物にしやうとて少しも怖れません、お龍は開き直つて。

『妹をお返し下さい』

『まあいゝでないか、お前様も其器量でくすぼつてゐるも惜しいや、いゝ旦那を世話してあげやう』

など、相手にしませぬ、夫れでお龍は雪の顔に朱を注いで。

『愈々返さぬとなら妾にも覺悟があるさあ返してくれなくれませぬか』

突如悪者の胸倉を捕へました。

『何をさらす、打んなぐられるぞ』

『なぐるならお殿りなさい、妾は貴方を殺すのです、さあ妹を返すや生命をくれるか』

と隠し持つたる懐劍をぬいて悪者の胸倉とらへて談判しました、其勢ひに悪者も驚いて到頭お龍のいふ如く妹を返へしてやりました。

此様にしつかりした女でありますから眼のつけ所が違ふ、大抵世間並の女なら



色の白い男とか生やさしい男と見込みをつけませんが、男勝りのお龍であるからそんな男に眼をつけず、龍馬の豪傑肌（ごうけつはだ）に思ひをかけてみました。龍馬は段々に志す所に實行を及ぼし、海援隊といふのを組織して自ら隊長となり、瀬戸内近海を乗り廻はしてました、而して天下の形勢を見て此際王政復古の大事業を成すには、先づ薩摩と長州を提携さしねばならぬ、薩長聯合が何よりも第一の急務だと、兩國の間を奔走してました。

其最中に龍馬は伏見の寺田屋へ泊つてゐた事がある、龍馬が伏見へ来て勤王の爲めに運動してゐると聞えたから、幕府では伏見町奉行に命じて龍馬逮捕方をいひつけました、夫れとは知らず龍馬は長州の三好慎藏と二人寺田屋の二階で話しをしてゐました、町奉行の同心與力共は大勢寺田屋へやつて来て、

『土佐の坂本といふ者が泊つてゐやう』

と詰りました、寺田屋の女將おとせといふのは之れ又女ながらしつかりもの、

『いゝえお泊りになつてゐません』

『然らば泊り客はあるか』

『ゐらつしやいます』

『夫れが坂本ぢや』

『左様でございますか、わたくしどもでは一向存じません』

此問答をば丁度風呂へ這入つてゐたお龍が聞きつけました、伏見町奉行から捕吏が来た、之れは坂本さんの一大事と、浴衣着る間もあらばこそ、湯巻き一枚で肌もあらはに裏手の梯子をかけ上り

『あの捕吏が』

『何捕吏が』

坂本と三好は兩人直に身構へをしました、坂本は高杉晋作からくれた短銃を手にし三好慎藏は手槍を掲げて、さあ来いと待ち設けました。



お龍が下へおりの頃、表梯子からドヤドヤと捕手がやつて来ました、併し誰一人進んでよるものがない。其中で度胸のいゝのが先づ斥候にとて二階へ来り。

「貴殿は何所の者ぢや」

「薩藩の者ぢや」

「詐りで御座らう」

「無禮千萬な事いはるな」

「薩藩ではござるまい」

「然らば薩摩屋敷へ聞き合せ見玉へ」

「何が偽め兵器を所持さるか」

「武士が兵器を持つに何不審ある」

捕吏の方は言葉がつまつて二階から下りました、併し之れは果して坂本龍馬であるや否やをためしに來たのである。

「たしかに龍馬に相違ない」

「然らば召し捕れ」

とドヤ／＼と二階へ上るより早く、坂本等は防戦の用意に襖を外づして了ふた。

「上意なるぞ」

と捕手は二階の上り口からわめいてかゝります。

「過まちすな、薩摩の侍が町奉行の上意など受ける要がない」

いひ様に手近の火鉢を取つて投げました、此時は捕吏はもう一杯になつてゐました。

「夫れかゝれよ」

むら／＼と來るを龍馬は短銃打ち放ちました。

「やあ鐵砲」

捕吏はどや／＼と退がる、其際に龍馬がほつと息つくを見て、一人の心利いた



捕吏は近みより様に龍馬に切つてかゝりました、龍馬は突差の間に短銃で受けたが、指を切りつけられて次の弾込めする事が出来ません。  
『やあ手を負へたぞ、それやれよ』

とかゝるを次の手の三好が手鎗をしごいて突き立て突き崩す、其猛勢に驚いて捕吏はドヤ／＼と退き、二階から追ひおろされました。  
三好は勝に乗つて階下へ追ひかけやうとしたを。  
『待ち玉へ』

と龍馬は引きとめて。

『此儘防ぐとて敵は多勢味方は二人、生恥かいてはならぬ、今の間に逃げやう、逃げるが勝だ』

と裏の格子を破り隣りの庭へおりて、一生懸命に逃げ出しました。  
一方お龍は今の騒ぎを他所にして直様宙を飛んで薩摩屋敷へ飛込み。

『只今町奉行から坂本さんを召捕に参りました』

『坂本君を召捕りに、夫れやつては我等の恥辱だ、急いで行かう』

と留守居役の大山彦八が兵を率ゐて驅けて來ました。

之れと入違ひに坂本と三好は薩摩屋敷目がけて走りましたが途中坂本は。

『僕は傷をしてゐるからいかん、君一人薩摩屋敷へ行つて事情をつけて迎へをよこさしてくれ玉へ、僕は其間此材木小屋で待つてゐる』

『いや若し見付けられては大變だ、死ぬなら一緒に死なう』

『併しかうやつてゐては却つて目に立つから、君一人いつてもらうのが却つて得策だ』

と三好をやり自分は材木小屋の梁の上に隠れてゐると、漸く事薩摩屋敷から迎ひが来てくれて安全に薩摩屋敷に入る事が出来ました。

こんな事から龍馬とお龍との縁は益々堅くなり、兩人夫婦になつた後も共々に



各所を歩き、遂に龍馬は王政復古の大事業を漕ぎつけて、これがため幕府に憎まれ京都河原町に於て會津見廻組の爲めに暗殺されました。

元日の夜の血闘

幕末當時京都に於て壬生浪人といへば鬼の如くに怖れられてゐました、其壬生浪人の頭目、近藤勇とて驍勇天下に鳴り響いたものであります。

最初壬生浪人乃ち新選組には芹澤鴨といふ隊長がりました、近藤は芹澤の次席であつたが、芹澤と近藤とは間柄がよくない、といふのは芹澤も武道にかけては相當の者でありましたが品行がよろしくない、類は友を呼ぶで芹澤の股肱は皆亂暴者許りであります、此等新選組は諸國の浪人が京都に集つて、中にはよからぬ事をするものがあるから夫等を取押へるために出來た團體でありましたのに新選組自身から亂暴を働いては何にもならぬ。

芹澤の横暴といふのがどんな風かといふと、常に三百匁の鐵扇を提げて見たり

次第に人を擲り、夫れですまらずに又しても人斬刀をひつこぬいて血の雨をふらし、或時は四條堀川の菱屋といふ商人の女房お梅が美貌を見染め、無理無體に奪ひ取つて妾となし、又毎夜島原に遊んで酔に乗じて膳腕器具を打ち碎くは固より、庭前の名木を引き切るといふ騒ぎ、其上或時の如きは自分が十二分の亂暴した揚句にまだ事足らで、其揚屋に

『七日間の休業を命ずる、若し我命令を聞かずば一家塵殺だぞ』

と豪い事をいふて残して歸りました、或る時は大阪の新町に遊び、小寅といふ藝妓が自分のいふ事を聞かぬからとて又も暴れ出し、小寅の鬚の根元から切り取つて、仲へ這入つて。

『まあ貴客はん無茶おしやすな』

と留に這入つた女中を例の鐵扇ではり殺したといふ事もある。こんな亂暴狼藉を働く事を聞き知つた近藤の腕はむずくして耐まらぬ、部下



の土方歳三等を集め。

『此上打捨て置いては新選組の恥ぢや、思ひ切つて遣つゝけやう』

『武士の風上に置けぬ奴ぢや、やらう』

と相談をきめて時は文久三年九月十八日の夜、新選組の大会議を島原角屋で開き、大酒宴の末に芹澤が酔ひ倒れたを見届けて、

『夫れやつちまへ』

と同志者数名芹澤の寢室へ躍り込み滅多切に切殺して了ひました。

之れで近藤勇は新選組の隊長となり、土方歳三は副隊長となり、隊の風規を厳

重にしましたが、文久三年の年も暮れあぐれば元治元年、世は新玉の年たちかへる朝にも世間は攘夷と開國勤王と佐幕で騒がしい。

松の内は公卿武家の往來が頻繁になる、夫れを見込んで不逞の者共が暗殺を計るに違ひないからと、近藤は部下に命じて市内警戒を一層嚴重にさし、自分自ら

も元日の夜山南敬介を従へて巡邏に出かけました。

京都の夜は到つて寒い凍る許りに冷たい、夜の九つ過ぎに近藤は人通り絶えた市街を巡邏してゐました、四條通りの、とある塀を大きく廻はした家の潜り戸からぬつと現はれた黒い人影がある。

『やあ曲者』

と近藤も山南も眼を見張ると、一人二人三人四人五人とまで數へられた、最早猶豫はならぬ。

『曲者待てツ』

勇は大喝一聲、一人の曲者の襟首捕つて投げた、曲者共は驚きながら相手は二人と見るや、一樣に刀をぬいて切つてかゝりました。

『何クソ』

勇も敬介も抜き合はして切り結んだ、相手の曲者も普通の泥棒にあらで腕に覺



えのあるものらしい、山南敬介は手強き一賊と切り結んでゐたが、エイと切りおろす一刀空を切つて一方の石堀にガチリと當りパツと火花が散ると共に刀は鏝元から折れて了ふた。

『失敗つた』

といふより早く切り込む賊の刃に左の腕を少しやられた、けれど氣轉のきいた男とて脇差を抜いて賊を仕とめた。

此間に勇は二人の賊を切つた、かうなつては耐らぬと外の奴は雲を霞と逃げました。

『ふむ、元日早々の真劍勝負は面白い、今年は得物が多いぞ』

とにつこと笑ひました、すると家の内では俄に物音騒がしくなり、十五六名の者共提灯手に手に得物を提げて現はれて來た。

『賊は仕とめたぞ、一兩人を切り倒した、之れを見よ』

『へいへい、やあ人殺し』

『何れ何所に』

と大騒ぎになる、此家こそ大阪鴻池の京都別邸でありました、鴻池と見込んで賊が這入つたが近藤のために阻げられて一物をも得ず逃げました、丁度鴻池の主人も元旦禁裏へ拜禮に來た序に此夜此家に宿泊してゐましたから、是非近藤さんにお目にかゝつて御禮を申したいとあつて、之れから近藤山南を座敷に請じ、懇ろなる待遇があつたが、山南の刀の折れたを見て氣の毒に思ひ、番頭にいひつけて土藏にある刀劍を取り出して。

『何れでもお氣に入りましたを』

といふ、近藤も好める道とて一々見ると流石大富豪の事とて何れも皆名刀であるが、中にも近江虎徹の一刀は見るからほしくて耐まらぬもの。

『主人、山南には拙者が差料を與へるから、此一刀を自分に貰ひたい』



と乞ひ受けて自分の差料としました、此虎徹こそ、同じ年池田屋騒動の折、近藤が此一刀を揮つて十數名を切つたが刀は少しも損せず。

『切り手も切り手なら、刀も刀ぢや』  
と虎徹の眞價が更に上つたといふ有名な話がある名刀でありました。

明治武人の典型

何日迄の語り草にしても感に耐へぬは乃木大将の逸話であります、明治年間の武人の典型としては先づ此人に止めをさします、此乃木希典の生家といふは決して豊かなものでなかつた、古來豪傑多く貧賤より出づる様ですが、希典の家も先づ貧しい方でありました、従つて少年の頃の着物といふ着物は皆父の着古しでありましたが、父は到つて昔風の堅い人でありましたから、着物は戦國風に筒袖に仕立て、着ておました、袴は小袴とて裾口を紐で結んでありました、一體乃木家の人は皆斯様に質素な風をして男らしい、けれど外見至つて粗末でありますから

希典の少年時分には外の少年から。

『何だあの風體は』

と笑はれましたけれど乃木希典はそんなことに心を止しません、夫れから父の十郎といふ人は公用をする都合で、朝一度に大飯を食べて置いて、晝も晩も御飯ぬきにするといふ習慣をつけましたら、希典始め外の兄弟も皆父の眞似をして食べ置きましたから、

『乃木の食置き』

とて有名な話になりました、斯様な質素簡易な生活でありますから、其所持の辨當飯といへば何日とて麥飯の握り飯で、握り飯の中に梅干を入れて置き、醬油をつけて焼いてある、誠にお粗末な辨當であります、之れも、

『乃木の辨當』

とて人の語り草になりました、だから近所の人も節儉するに皆乃木家を目安に



して少年が贅澤なことをせがむと。

『お前、少し乃木さんの真似をしろ』  
と叱り付けたといふ程であります。

こんな節約した生活してゐるけれど、乃木家の生活は樂でなかつた、一體に家族も多かつたものです、だから父も母も米搗合で自身足踏みで米を搗き、小供にも之れをさしました、希典少年の頃は一人では力が足りないから、弟と二人して踏みながら兩方ともさうやつて本を讀んで勉強したさうであります。

希典の少年時代の教育は斯様な嚴肅なものでありましたが、まだく父母は我子の教育には注意を拂つてゐました、例うれば食物に好き嫌ひがある。

『阿母さん、私は何しても此豆は食べられません』  
といひますと、母はあゝさうかいといひませぬ。

『さうですか、併し他の人が食べるからお前丈け食べられないといふことはなか

らう』

と例へ何なまづいものでも一家お付合ひに食べさせ、すると我慢して皆が食べますと、母は希典に向ひ。

『夫れ御覽、外の者は皆食べます、お前丈け食べられない事はない、人間の食べるものは皆一つです』

とたしなめられて、夫れが食べられる様になる迄は一週間が二週間かゝつても一月かゝつても食べられる様に力めさせました。

又ある時、希典が塾から歸つて來る時冬の寒い折でしたから、つい。  
『あゝ寒い寒い』

といひますと、父は之れを聞いて。

『希典、此所へおいで、お前寒いといつたが、そんなに寒いかい』  
『はい』



「ぢや 温くしてあげやう」  
温めてくれるとは結構だと思つてゐますと。

「乃公と一緒においで」

と戶外へ連れ出されました、家内にもいゝ加減寒くて耐へられぬに、此寒風吹く屋外へ連れ出されてたまるものでない。

「阿父さん何所へ行くのです」

「乃公の連れて行く所迄来ればいゝ」

何所へ連れられるかと思ふと、凍て切つた井戸端へ連れられて、何するかと思へば、父は井戸から水をがらりと汲み上げて。

「さあ頭を出した」

寒空に凍て切つた井戸端で、氷のやうな水を頭上からざあ／＼かけられた。

「さあ何うだ、これで少しはあたくくなるだらう」

之れから希典は決して、「寒い」とか「暑い」とかの弱い音を吐かぬやうになりました。

其内希典は成長して一人前の侍となりました、明治政府となりたる後乃木は陸軍に職を奉じ、明治八年には廿七歳にて豊前小倉に赴任して熊本鎮臺第十四聯隊長 心得となりました。其時分不平の士族が集り集つて今にも勃起せん形勢がありました、或る日希典の實弟玉木正誼といふのが小倉の希典の所へやつて來まして。

「實は自分は前原一誠に頼まれて兵を擧げやうと思ふといふのは、今の政府はやり方がよくないとして士族は皆不平を持つてゐる、士族が町人共と同じくなるなど今迄二本手扱んだものゝ我慢出来る事ぢやない、こんな事をやる政府はよくない政府ぢやからぶつ潰さうと、前原一誠先生に頼まれたが、兄様も賛成してくれな



といふすゝめでありました、希典之れを聞いて驚いたが、さあらぬ體に。  
『今は少し用事があるから詳しい事を聞いてゐる譯にいかぬ、後刻改めて詳しい事を聞いて其上判断しやう』

と一度弟を返へして、扱自分の副官を呼び以前の室の押入れに隠れさし、再び弟に目的や手段を語らした。

『併し前原君の議論は間違つてゐる』

と希典は駁論した、弟の正誼は之れに對して反駁し双方大議論したが、何うも説が一致しさうにない。

『此上は理窟は如何にあれ一度前原先生に誓つた言葉を反古にする譯に參らぬ、兄上は兄上の欲する所を私は私の欲する所を進みましやう』

と兄弟分れる事になりました、希典は此言を聞いて兩眼に涙をためながら、弟の手をしつかと握り。

『不幸にして兄と弟とが一つになる事が出来ないは、私にもお前に取つても恨みぢや、併しかうなれば詮方ない、お互に取る方に進む許りぢや、唯自分は兄としてお前に一言餞別にするが、夫れは戦死の二字だ、お前は戦死より外がない』  
といひ、水盃をして別れました、人情からいへば希典は弟を捨てたくないが、大義親を滅するの言葉もあります。

希典は弟が歸るなり直ぐ押入れで聞かされた副官を證人として。  
『前原一誠が謀反しかけてゐる』

事情をば其筋に向つて發電しました、此飛電に依つて官軍は早く前原の謀反を知る事が出来、夫れく手當をしたから案内容易に鎮める事が出来ました。

前原の亂がすんで後、西南戦争が起りました、乃木希典は第十四聯隊を率ゐて奮戦しましたが、植木の戦ひに優勢なる敵軍に會して利あらず、背進する際軍旗を敵の手に取られた、軍旗を敵に取られたとあつては希典死する思ひで、當に敵



陣へ切り込み、戦死をと逸つたが谷少將に止められて果さなかつた、けれど恥を知る乃木希典は一度は無益の戦死を思ひ止つたけれど、もう決死の覚悟は更に堅くなつて木の葉に於て激戦をやりました、此戦ひにも敗れました、乃木は植木と木の葉の兩役に敗北したのは、一は敵軍が非常な多勢であるからでありました、併し此敗北は決して無効でなかつた、といふのは此際進軍し來る薩の大軍を食ひ止めたは乃木の第十四聯隊と、敵軍に取圍まれた熊本城丈けでありました、乃木が少數の兵で賊の大軍を食ひとめるには非常な激戦をやりました、さうして衆寡敵せず二度とも敗北しましたが、此間に官軍の大部隊は九州に上陸して賊軍に向つて進軍しました、つまり此官軍の大部隊の準備が出来る迄賊の大軍を食ひとめたは乃木軍の大きな効績でありました。

は我慢が出来ない、病院を脱け出して田原坂の悪戦に出て大に働きました。西南戦後次第に出世して日清戦役には第一旅團長となり旅順攻撃に手柄をなし後臺灣に戦ひ、臺灣總督になりました、日露戦役には旅順攻圍軍の司令官として難攻不落の堅壘を攻め、肉弾又肉弾、世界戦史上に有名な悪戦をなして、遂に敵將ステツセルの降伏せねばならぬ所迄突撃した事は世の熟知せる所であります更に明治天皇陛下崩御あるや、悲痛措く能はず 御大葬の當夜乃ち大正元年九月十三日午後八時、御大葬の弔砲鳴ると同時に

希典

うつし世をかみさりました大君の

みあとしたひて我はゆくなり

神あかりあかりましたぬる大君の

みあとほるかにおろがみまつる



豪傑奇談集終

静子

いであして歸ります日ひのなしときく  
けふけふ今日の御幸みゆきに逢ふぞかなしき  
と夫妻ふさいせい辭世せをのこして殉死じゆんしした忠烈ちうれつ無双むさうは永ながく世よに傳つたへて日本武人にほんぶじんの譽ほまれと  
ひ残のこすべきことであります。

大正四年五月壹日印刷  
大正四年五月五日發行

定價金拾五錢

著者 文永館編輯所

發行者 齋藤藤次郎

印刷者 青柳十一郎

場工一第合英秀 所刷印

不許複製  
第一叢書  
第五拾編  
豪傑奇談集

發行所

東京市神田區表神保町參番地  
振替貯金口座東京壹參五〇番

文永館

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地



# ◀ 書 叢 五 一 ▶

◎ 第十編	◎ 第九編	◎ 第八編	◎ 第七編	◎ 第六編	◎ 第五編	◎ 第四編	◎ 第三編	◎ 第二編	◎ 第一編
豪傑奇談集	探偵小説 銀行大賊	明治復讐奇譚	西郷隆盛	橋場の長吉	紀文大盡	地獄の蟲	怪談十三鐘	怪力半四郎	不思議の女戰士
丸山文學士著	コナン Doyle 原著 吉田文學士譯	鯨海文學士著	中村法學士著	市村俗佛著	堀田文學士著	鳥山文學士譯	秋山法學士著	内藤法學士著	堀田文學士原著

以下續出

定價各金拾五錢 每冊插畫  
 數葉插入第一壹期全部完成



278  
236



終

